漢字の神話

第二章

漢字の見方、考え方

今までは、まだ学習したことのない漢字、初めて見る漢字は、先生に教えてもらうか、辞書で調べるかしなければ、読めないもの、わからないものと決まっていました。しかし、形声文字の構成法がわかれば、初めて見る漢字でも、どういう意味を持った、何と読む字か、おおよその見当がつくのです。

こういう学習法で漢字を学習していきますと、推理力が高まり、ほんとうの意味での学力がつきます。なぜなら、ほんとうの学力とは、知識を丸覚えして蓄えることではなくて、既知の知識を活用して、未知の分野を開拓していく力のことだからです。

今までのような、がむしゃらに漢字を覚えるような態度、ただ数を多く覚えさえすればよいというような学習法で得られた漢字力は、ほんとうの漢字力とは言えません。

では、漢字をどのように見、どのように考えたらよいのでしょうか。これを実例によってお話いたしましょう。

☆　☆　☆　☆

冓

まず、構造の〝構〟という字を考えてみることにします。冓という部首は、その字形が示しているように、棒をたてによこに交叉させ組み合わせて、物を形づくることを表わした部首です。発音は、交叉（コウ）の〝コウ〟です。従って、〝冓〟の部首を持った字は、すべて〝コウ〟と読んで、〝物を左右、または上下にさし渡す〟〝組み立てる〟という意味を持った字と考えればよいのです。

構は、木を左右上下にさし渡し、組み立てることです。それで「構造」「構築」等と使います。

講は、言（ことば）を組み立てて、それを話し手から聞き手へとさし渡すことです。講義、講話、などと使います。

購は、貝がお金を意味する部首ですから〝お金を相手に渡して、品物を買う〟ことだとすぐ見当がつくでしょう。購入とは、買い入れるということです。

溝は、こちらから向こうへ〝水をさし渡す〟ためのみぞだということも、容易に察しがつくはずです。

このように〝冓〟という部首の持った意味や発音を理解することによって、それと何とが組み合わされるかにより、どのような意味の漢字ができあがるかということが推察できるのです。

「構、講、購、溝」これらの漢字を、ばらばらに一字ずつ無関係なものとして学習するならば、どの字一つを取ってみてもひどくむずかしく、覚えにくいものになるでしょう。ところが、これをひとまとめにして、相互に関連させて学習しますと、かえって、全体の方がこの中の一字だけを覚えるよりもやさしく簡単に覚えられ、しかも、その記憶は強く、しっかりとしたものになることが、よくおわかりいただけると思います。

では、形声文字の構成法を理解するために、いくつかの部首についてしばらく考えてみることにしましょう。

僉（僉）

よくテストに出されるもので、誤まりやすい漢字に、探検の検と冒険の険、試験の験と検査の検があります。

検、険、験、……。右側の部分が同じだけに、これらをよく取り違えてしまうわけです。それは、これらの漢字の意味を正確に知らないために間違えるのですが、結局は「木、阝、馬」と「僉」という、部首の持つ意味や性格を知らないためにおかす誤まりというべきです。

今までのように「探検」とは「……」という意味のことば、「冒険」とは「……」というように、ただがむしゃらに覚えたのでは、検と険と取り違えるのがあたりまえです。

ところが、木と阝の違いさえ理解すれば、もう絶対に取り違えることなどなくなります。

僉は、亼（シュウ）と口（くち）と人（ひと）の三つの部首から成り立っている部首です。旧字体では「僉」で、亼と口と从でできていましたが、構造的には新旧とも全く違いはありません。

亼（シュウ）は、「集（シュウ）」の意味の部首で、三方からひと所に集まることを符号的に示した指事字

です。亼が原形です。「会」や「合」の上の部分がこれです。従って「僉」は「人の口を集める」つまり、「人々の意見を集める」ことだと推察がつくでしょう。古典に「公卿僉議」という見慣れないことばが出て来ても、このような学習をしていれば困らないはずです。

検は、記録（昔は紙がなかったので、木や竹のふだに字が書かれた）によって意見を集約する、「しらべる」という意味の字です。つまり、木は今の書類を意味する部首で、同じ木から成る査という字と組み合わせて「検査」というように使われます。「探検」は「さぐりしらべる」意味ですから、どうしてもこの「検」でなければなりません。

僉は、議論を集約することですから、「約」（きりつめる）という意味にも使われます。「倹約」の倹がこれです。人が生活の無駄を切りつめることなので、亻と組み合わせられました。

また、物を集約するためには、取捨を峻厳にしなければなりません。選抜するためには、どうしてもきびしさが伴います。それで「僉」には「きびしい」という意味が生まれます。険や嶮の僉がこれです。

阝は、古い字形はβで、崖の象形です。崖という意味の部首です。崖の峻厳なのが険であり、山の峻厳なのが嶮です。大変に「あぶない」ので「危険」、というようにも使われます。「冒険」とは、あぶないことをあえてする（冒はおかす）ことですから、これも「険」でなければなりません。

験は、たくさんの馬の中から駿馬を〝選抜する〟ことです。これは毛なみや体格を見ただけではわからないので、駈けさせて〝ためし〟てみなくてはなりません。だから〝ためす〟というのが本義で、「験算、実験、試験」など〝ためす〟意味の時に使うのです。

且

検査の検はよくわかったと思いますが、では〝査〟はどういう漢字でしょうか。

且は、地上に物を積み上げた形を表わした部首です〝積み重ねる〟のが本義です。

査は、〝記録（書類）を重ねる〟ことで、〝しらべる〟という意味を表わしたものです。音は、且（ソ）が変化してサとなりました。so→sa このような変化を同行相通と言い、よくある変化です。

祖は、なくなったおじいさん、ひいじいさん、そのまたおじいさんを言います。〝ネ〟は示（しめす）へんと言い、神様に関係ある部首で、多く〝神〟の意味に使われます。従って〝祖〟は、先祖代々の神様ということで「先祖」「祖先」というように使われます。

組は、何本もの糸をくみ合わせて編んだ〝くみひも〟が本義です。

今は、糸をくむことに限らず〝くみ合わせる〟意味の〝くみ〟に広く使われています。

租は、積み重ねられた稲のことで〝税として納めるために用意された稲〟を指しています。今の租税は、金で納入するので「税金」と呼ぶようになりました。

粗は、積み重ねられた米ということで「玄米」が本義です。禾は木で、稲の象形ですが、米は稲から脱穀した米粒の象形です。税用の米は、長く貯蔵され、もみがらをつけたままですから禾へんで、「租」となります。

しかし、家庭用に貯蔵された米は、もみをついてもみがらを取り去り、玄米にしますので米へんの「粗」という字になります。食べる時には、玄米をついて、黒皮やぬかを取り去ります。これが精米です。今では、粗も精も、米に関係なく「粗製」「精製」などと広い意味で使っています。

助は、〝力を重ねる〟という意味で〝力を貸す〟つまり〝たすける〟ことを表わした字です。音はソがなまってジョ。援助、助力。

且のついた漢字には「岨」「阻」「疽」「沮」などがあります。どういう意味の字か考えてみて下さい。きっとわかるでしょう。岨は、山また山、山の重なりあった〝けわしい〟という意味。阻は、崖の重なりあう意味。疽は皮膚のはれ上がる病気です。沮は、提防を高く積みあげて、洪水を〝ふせぐ〟という意味の字です。

青

粗の反対の精が出たので、ついでに「青」のつく字を考えてみましょう。晴・清・情・静・請のほかに、睛・靖という字もあります。

青は、~~青~~が本字で、生(セイ)と丹の合字です。丹石という石から赤色の染料をとるのですが、同時に青の染料もとれるので、あかを丹(タン)と言い、あおを〝丹より生ずる〟という意味で〝青〟とし、発音は〝生ずる〟のセイを取ったのです。あかとあおとは色の基本ですので、絵の具や絵のことを「丹青」と呼ぶことがあります。

清は、水の青くすきとおって見える状態を言います。「濁」に対する字ですが、今では、水に関係なく、清潔、清新など、広く汚れのない意味に使います。

晴は、青空と日とで〝はれ〟の意味を表わしています。清も晴も、〝すぐれた状態〟で

すから、〝青〟は〝ずぐれて良い〟という意味を持つようになりました。

情は、心のすぐれた状態を意味しています。〝思いやりの心〟です。人情、情愛。

請は、情をこめて言うこと。〝真心こめた言葉〟という意味です。請願、請求。

靖は、落ちついて、静かに立っている状態を表わしています。〝安定〟していることですから〝しずめる〟〝やすらか〟の意味に使われます。靖国。

静は、争いを〝しずめる〟意味から、〝動かない〟〝しずか〟の意味に使われています。静止、安静。

睛は、目の最も大切なところ〝ひとみ〟です。西洋人のひとみは文字通り「青い目」をしていますね。

瀞は、水が静かにさざ波も立てずに流れている所、つまり〝どろ〟を言います。埼玉の長瀞、吉野の瀞八丁など。

主

主は、▲で、燭台にあかりのついている象形です。あかりは家の中心に置かれるので「中心」の意味に使われます。キリスト教では、中心の意味でキリストを指して使います。部首としては「中心に向かって集まる」「集中する」の意味に多く使われています。音は、火のシュウシュウと燃える音を取って「シュウ」ですが、つづめて「シュ」と読む方が多いようです。主人（シュ）（一家の中心となる人）の意味。主従、主客（従に対するもの、客に対するものとしても使います）。

柱は、〝家の中心となる木〟の意味で〝はしら〟です。大黒柱、支柱。〝ささえ〟の意味にも使われます。

注は、川の水が、中心である海に向かって〝そそぐ〟意味です。この主は〝集中〟の意

味に使われています。「注目」「注意」は、目や心をそれぞれある点に集中させることです。

住は、人が集中するの意味で、それは、人が都会に集まりすむことを表わしています。居住、住民。

駐は、馬が集中するのは〝軍隊が滞在する〟場合です。だから〝軍隊がある場所に止まる〟という意味に使われます。駐屯。また、役人が任地に止まる意味にも転じて使われます。「アメリカ駐在大使」。駐を〝馬を止める〟の義として、今では、転じて、車を止めることにも使われます。駐車。

註は、言葉を集中させるの意味で、むずかしい言葉に対して〝説明を加える〟ことを表わしています。註釈、註解。〝言葉を注ぐ〟の意味です。だから注釈、注解とも使われています。

戔

戔は戔の略字。戈は〝ほこ〟の象形字。ほこには、〝矛〟〝干〟の象形字もあり、〝干戈〟で戦争の意味にも用います。戔は、ほこを交えた形ですから、〝戦う〟〝きずつけあう〟のが本義です。部首としては、〝きずつけそこなえばなくなる〟ことから、〝わずか〟の意味に使うことが多い。音はセン。

浅は、水がわずかということで〝あさい〟ことを表わしています。深浅、浅薄、浅学。今では、水に限らず〝学問が浅い〟というようにも使います。

銭は、わずかなお金ということで、今ではわずかなか金の単位（一円の百分の一）に使われています。金銭。

賤は、お金がわずかしかないということで〝貧しい〟〝身分のいやしい〟ことを表わした字です。貝は、かいの象形ですが、部首としては財宝や金銭の意味を表わします。貧賤、下賤。

残は、わずかな骨（歹は骨の一部を表わした形）ということで〝食べのこり〟の意味を表わしたものです。今では「残金」「残月」「残念」（心のこり）などと広く使います。音はザン。

餞は、わずかな食事という意味で〝送別の宴〟を、送る側が謙遜して〝餞〟と言いました。餞別、はなむけ。

箋は、わずかな竹ふだという意味で、今の「メモ」に当たるものを言います。紙のない昔は、木や竹のふだに字を書きました。便箋、通信箋。

盞は、小さい皿（さら）の意味で〝さかずき〟のことです。音はサン。

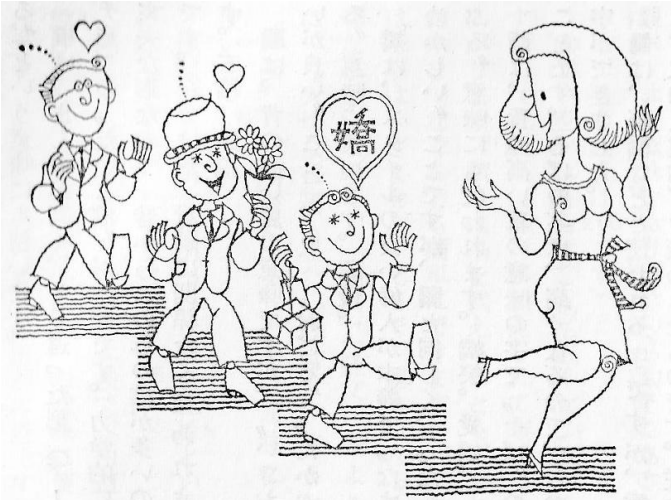
桟は〝わずかな木の切れ〟が本義で、今では戸や障子の横木のことを桟と言います。「桟橋」というのは〝木切れを組み合わせて作った粗末な橋〟という意味のことばです。

践は〝小きざみに足を運ぶ〟ことで〝踏む〟〝行なう〟意味に使われます。実践。

喬

桟橋ということばが出ましたので、今度は喬について調べてみましょう。

喬は、夭（ヨウ）と高（コウ）との合字で、音もkôとyôでkyôです。夭は、で、頭の曲がった人の象形です。従って、喬は、高くひそびえて、上の方の曲がっていることを表わした部首です。「喬木」「喬松」など、単に〝高い〟意味に使いますが、〝そりかえる〟意味から、〝威張る〟という意味にも使います。



橋は、まん中が高く、そり返った形（アーチ形）の〝たいこ橋〟が本義です。力学的に丈夫な形なので、昔からこの形の橋が多いのです。今では形、材料に関係なく使われます。石橋、鉄橋。

驕は、背の高い馬の意味ですが、〝いきおいが良い〟ことから、〝おごる〟〝たかぶる〟意味に使います。騎慢。

嬌は、スタイルの良い婦人が本義で〝なまめかしい〟ことですが、驕と同じく、〝たかぶる〟意味にも使われます。嬌笑、愛嬌。

蕎は、背の高い草の意味の字で〝そば〟のことです。そばの茎は、高くなるので、この字ができました。

僑は、華僑などと使われる字ですが、喬は、高（建物）を表わしたものです。従って、僑は〝人が建物にやどる〟ことを表わした字です。〝仮のやどり〟の意味に使います。華僑はこの意味です。

矯は、〝先の曲がった矢〟という意味になりますが、これはそうではありません。曲がった矢ではあたりませんから、必ず〝まっすぐにため〟て使います。だから〝曲がっている〟という意味（矯偽）と〝ためる〟意味（矯正）とあるのです。

高は、高で、高い建物の象形により〝たかい〟ことを表わした指事字です。僑では、象形字として〝建物〟を表わしました。

圣

圣の本字は巠で、(巠) 織機（はた）に張られた〝たていと〟の象形です。〝たてにまっすぐに通す〟という意味の部首です。音はケイ(漢音がei の音は、呉音は yō ですから、圣の呉音は kyō です)。

経は、圣の本義「たて糸」を表わした字です。これに横糸（緯）が加えられて布ができあがります。横糸は糸を代えることも、切れた糸をつなぐことも簡単にできますが、縦糸はそうはいきません。そこで、基本になる大切な糸というので、「経典」「経文」のように、〝大切な書物〟また「経営」のように〝計画〟し、〝おさめる〟という意味にも使います。地図の上に南北に引かれた線を経線というのは〝たて糸〟という意味です。

径は、〝まっすぐな道〟が本義で、山道に設けられた〝近道〟〝小みち〟の意味に使われます。山道はつづら折りの道が本道ですので、近道はまっすぐな道であり、小道なわけです。彳は行、つまり⺍で道の象形です。〝道〟または〝歩く〟ことを表わす部首です。

〝直径〟というのは、円周上の一点から反計側に円周にそって行く、行き方に対して、「中心を通って〝まっすぐに〟引かれた線」という意味のことばです。

茎は、草のまっすぐな部分ということになりますから〝くき〟であることはすぐわかると思います。

脛は、月が〝肉体〟の意味の部首ですから、体のまっすぐに伸びた部分とは〝すね〟を表わした字であることがすぐわかったと思います。

頸は、頁が〝頭〟の意味の部首ですから、頭の茎に当たる所は〝くび〟以外には考えられないでしょう。故事にある「刎頸(フンケイ)の交わり」とは、くびをはねられても後悔しないというかたい交わりのことです。

痙は、疒が〝病気〟の意味の部首ですから、〝すじの病気〟ということになります。筋が引きつれる病気で普通「痙攣」と言います。

軽は〝径（小道）を走らすことのできる車〟という意味で〝径車〟が本義です。〝軽快な車〟ということから、単に〝軽快〟の意味になりました。軽便、軽装。また「軽率」（かるはずみ）や「軽蔑」（軽んずる）というようにも使います。

勁は、〝つららき通す〟力のあることを表わしています。〝つよい〟〝丈夫〟の意味の字です。

剄は、刂が刀の意味の部首ですから、〝刀で頸（くび）を切る〟という意味の字です。

逕は、径と同じ成り立ちの字で「小みち」「近道」の意味の字です。径と同じように使われます。

易

易は、昜の変形です。丁はこの字の音を表わす符号だけの存在です。意味は昜にあります。日の光のふりそそぐ有様を表わした部首です。音はトウ。普通はなまってチョウと発音します。tô→yô 濁ってジョウ。yô→yô またyô ヨウと発音されることもあります。

湯は、〝日光であたためた水〟ということで〝日なた水〟が本義です。今は、火であたためたものを湯と言いますが、昔は、太陽光線を利用したことが、字の成り立ちから察せられます。

陽は、阝が崖の意味の部首ですから、〝日あたりの良い崖〟が本義です。山の南側は、日あたりの良い斜面になっていますから、これを「山陽」と言います。中国山脈の南側を山陽地方と呼ぶのは、陽の本義にかなっています。ついでに言いますと、川では北側が日

あたりの良い斜面になっていますので、「河陽」と言うのは、川の南側ではなくて、北側なのです。陽は、南斜面の意味から〝ひなた〟の意味に用いられ、さらに〝日そのもの〟を指すようになり、「太陽」という言葉が生まれたのです。

場は、〝日あたりの良い土地〟というのが本義です。今は、単に〝土地〟または〝ところ〟の意味に使われています。牧場、劇場。

暢は、構成がちょっと違います。申は中で、両手（⊕）で棒をまっすぐに引きのばす意味の字で、「伸」（のばす）の本字です。易（チョウ）は、音の同じ「長（チョウ）」の意味を借用して、〝長く引きのばす〟意味を表わしたのが暢です。流暢（のびのび、すらすら）。

腸も、易は長を借用しています。人体で最も長くのびのびと続いているものが腸です。

傷の 𤼈 は、𤼈 の略で、〝日にあたる〟のでなくて〝矢にあたる〟こと。傷は、〝矢にあたって受けたきず〟が本義。音は矢易（ショウ）でsyô

莫

莫は、𦯍で、草原の草の中に日が沈んだところを表わしたもので、〝夕ぐれ〟が本義です。日が隠れて見えないので〝ない〟の意味にも使われます。音は、𦯍が草の茂（しげ）っている形を表わしているので「茂（ボ）」です。転じてバクの音があります。寂莫（セキバク）。

「莫大」は、草原の〝果てしなくひろい〟意味を取って〝とてつもなく大きい〟という意味のことばです。

寞は、家（宀）の中に人がいないので〝ひっそりと静まりかえっている〟こと。〝さびしい〟の意味もあります。寂寞（セキバク）。

暮は、莫が〝夕ぐれ〟の本義を失なったので、莫にさらに日を付けて〝夕ぐれ〟専用の字としたものです。「歳暮」（年のくれ）という使い方もあります。

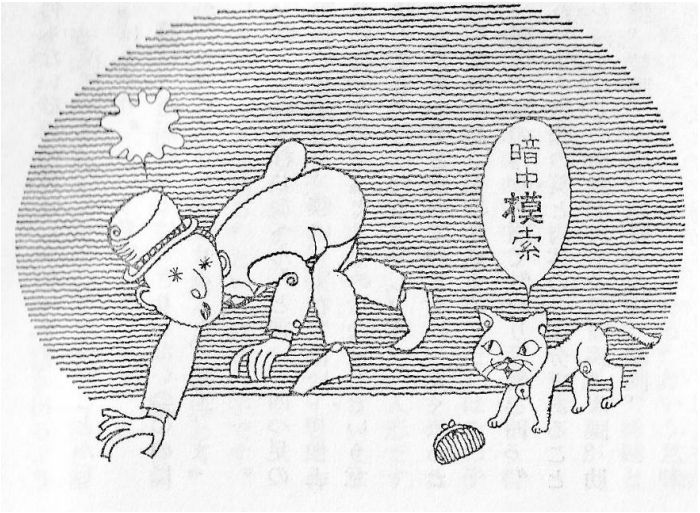
墓は、人生のくれ、終着所の土、つまり〝おはか〟です。墓地、墓穴（を掘る）、墓標、墓碑。

慕は、〝夕ぐれの心（小）〟という意味の字。夕ぐれになると、何となく物悲しく、人恋しくなるものですから、〝したわしい〟気持を、〝夕ぐれの心〟で表現したものです。慕情、愛慕、追慕。

募は、〝夕ぐれの力（つと）めという意味の字。夕ぐれになると放牧の家蓄を呼び集めるのが仕事です。〝呼び集める〟こと。募集。今の入学試験のように、集めようとして苦労しないでも向こうから集まってくるのはほんとは〝募〟とは言えませんね。

摸は、夕ぐれになり、物が見えないというので、手さぐりすることで、〝手でさぐる〟のが本義。暗中摸索。

手で物をさぐる時は、手の感触から、その物の形ありさまを心の中にえがきます。それで、〝同じものを心の中にえがく〟ことを摸と言うようになりました。「摸倣」は、実物と一々ひき比べながら、それと同じものを作り出すことです。〝まねる〟こと。摸写。



模は、同一の物をたくさん作る時の〝木で作ったかた〟。木と摸の意味の莫との合字です。ついでに言いますと、〝土で作ったかた〟は「型」、〝竹で作ったかた〟は「範」と言います。模と型と合わせて「模型」というのは〝いろいろなかた〟という意味です。模と範の「模範」は〝手本〟という意味に使

われます。

幕は、莫と巾（ぬの）の会意形声字。〝日ぐれのようにあたりを暗くする布〟の意味で「まく」を表わしました。軍人（武士）は幕を張ってこれに宿営することが多いので、軍政のことを「幕政」と言い、その役所を「幕府」と言います。

漠は、草原の果てもなく広い意味の莫と水との会意形声字。〝広々とした海原〟が本義ですが、「沙漠」というように、見渡す限り何もない砂原の意味にも使います。

「漠然」は、〝どりとめもない〟ことから〝ぼんやり〟という意味に使います。

驀は、道が暗くてはっきりしない（莫）のにがむしゃらに馬を走らせること。驀進、まっしぐら。

貘、豸は〝むじなへん〟と言い、四つ足の動物の象形です。貘は、実在しない、想像上の動物ですので、〝どりとめもない〟という意味の莫（バク）と名付けたものでしょう。

人の悪い夢を食べて邪気を払ってくれるという霊獣だということです。

膜は、幕の〝物を隔て〟たり〝物を囲っ〟たりする意味の莫と肉体の部分であることを示す月（にくづき）との会意形声字。横隔膜、腹膜、肋膜、鼓膜、網膜、粘膜、角膜、結膜。

甬

用は甬で、牧場にはりめぐらした柵の象形で〝はりめぐらす〟のが本義です。「用心」は〝心を用（もち）いる〟ことだと解いていますが、〝心をはりめぐらす〟ことだと解くべきでしょう。柵のどこが破れても牛は逃げてしまいます。火の用心は、どこにちょっとした油断があっても大事をひき起こします。どこにも欠けた所がないように心を周囲のすみずみまではりめぐらすのが、「用心」ということなのです。柵は牧場になくてはならぬものなの

で、〝必要〟〝役に立つ〟〝使う〟の意味が生まれました。

甬は、柵の上に人の頭の見える様子です。柵の様子を見に柵にそって〝まわる〟のが本義です。

踊は、〝足でぐるぐるまわる〟という意味で〝おどる〟ことを表わしています。舞踊というものは、輪を作ってぐるぐる回りながら踊るものです。

俑は、見かけない字ですが、孟子という書物に、孔子が〝初めて俑を作った人はその子孫がほろびるであろう〟と言って俑を作った人を憎んだことが見えています。人形ですが、手足が動くようになっていたと言いますから、〝踊る人形〟の意味で、甬と亻とで作られたのかと思われます。

涌は、〝水が踊る〟という意味の字です。地中から、地下水が踊り出るように〝わく〟ことです。涌の音は用(ヨウ)で、甬、俑、踊、みな同じです。

勇は、甬と力との会意形声です。〝涌き出る力〟という意味の字で、泉の涌き出るように自然と心の中にみなぎってくる力が「勇気」です。たまり水のように使えばなくなってしまうような力ではなく、使っても使っても溢れてくるような力です。音は用(ヨウ)が変化したyû

湧は、全く涌と同じ意味の字です。発音は、ヨウともユウとも読まれます。湧出（ユウシュツ・ヨウシュツ）。

通は、柵にそって道を行き来するのが本義です。柵があって安心してとおれるので、〝物事がうまく行なわれる〟の意味に用いられます。「通人」というのは、「世の中の万事を知りつくした人」という意味です。通は、単に「歩く」「行く」の意味ではなくて、〝ずらすらと〟という意味が加わった字です。通用、通読。音は用から変化したトウ、またはツウ。

桶は、まわりを木でぐるっと囲んで作った〝おけ〟ということが想像できますか。この甬は〝はりめぐらす〟の本義によったもので、〝木をはりめぐらして作った容器〟という意味の字です。音は用（ヨウ）ですが、トウ、ツウの音もあります。

痛は、体じゅうにはりめぐらされた神経に感ずる病気という意味の字で、〝いたむ〟ことを表わしています。痛み自体は病気ではありません。体のある部分が病気で異状を呈していることを通信するのが〝痛み〟であるわけです。音は、通と同じツウです、痛快、痛感というように、〝ひどく……〟の意味にも使われます。

兪

兪は、人と舟と川の合字です。現在の「月」の部首には「月」のほかに「肉」の変形したもの（にくづき）と、「舟」の変形したものとあります。「前」という字の月はやはり舟の意味の月です。人は、P30 の**食**の人で、〝集合〟の意味の部首です。〝川に舟がたくさん集まっている〟ことを表わしたのが兪です。〝舟で物を運ぶ〟のが本義です。音は舟（シュウ）ですが、つまってシュ、今はさらに省略されてユと発音されます。

輸は、〝車で物を運ぶ〟という意味で、舟で物を運ぶ意味の兪に車を加えて作られました。「輸送」は、車で荷物を運送することで今も昔も変りませんが、今の「輸出」や「輸入」は「兪出」「兪入」の方が字義に合っていますね。これからは、車を除いて使おうではありませんか。ついでに言いますと、「舶来」という言葉は〝船舶で運んで来た〟という意味の字で、今の「輸入」と全く同じ意味の言葉ですが、この方が〝ふね〟という字を使っているだけ、正しい使い方をしていると言えます。

諭は、〝人を言葉で運ぶ〟という意味の字です。道理のわからない人、間違ったことを

している人を、正しい道へ移るよう、よく言葉をつくして〝さとす〟ことです。説諭。小学校から高校までの先生を〝教諭〟というのは、生徒をりっぱな人に導くため、教えさとす役目を持っているからです。

愉は、〝人の心を望む所に運ぶ〟という意味の字です。従って〝気持が良い〟〝たのしい〟ことです。愉快。

愈は、愉と同じ、俞と心との会意形声字です。この字は〝心が前進する〟という意味で、舟が前へ前へと進むように、心の働きがだんだんとりっぱにたることを表わした字です。〝りっぱである〟という意味と、〝ますます〟という意味とあります。

癒は、病気がなおって、気持良くなることです。治癒、快癒。

瘉、病気を向こう岸に渡すという意味の俞と、疒とで病気の「なおる」意味を表わしています。癒と同じように使います。

喻は、論と全く同じ意味で出来た字です。従って、〝さとす〟が本義ですが、教えさとす場合に用いる〝たとえ話〟の意味に使うことが多いようです。比喩。

覦は、舟をあやつる時には、絶えず水路の状況を見ていなければなりません。それで、俞と見とで、〝様子をうかがう〟〝のぞき見る〟という意味を表わしました。

偸は、〝物を運び去る人〟という意味で、〝ぬすびと〟を表わした字です。音は、舟（シュウ）がなまったチュウ、またはトウ。「偸安」は一時の平安をむさぼって努力しないことを言います。

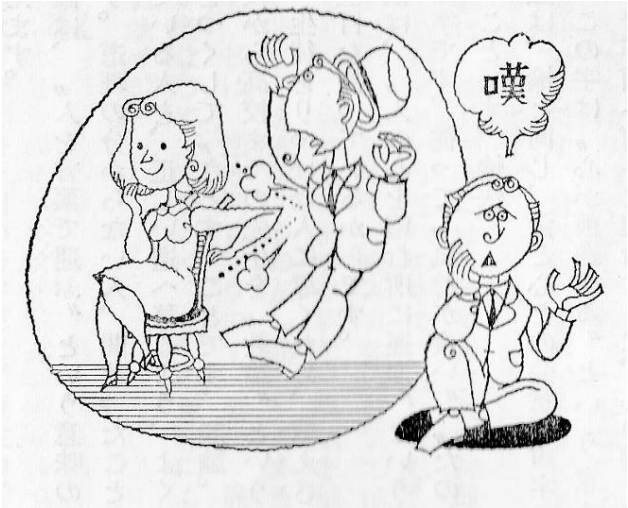
踰は、舟でなくて〝足で歩いて川をわたる〟ことから〝渡る〟〝越す〟という意味です。音は俞（ユ）。

菫（堇）

菫（堇）は、黄と土との合字です。中国の黄河の上流には広大な地域にわたって黄土層があります。この黄土が黄河にとけこんでいつも黄色く染めているのです。黄土は、質は至って細かい、粘って扱いにくい土です。それでこの黄土で、〝細かい〟〝扱いにくい〟という意味を表わしたのです。音は、黄（コウ）から変化してカン（kan）です。また、土（ト）（to）の音が加わってタン（tan）とも発音されます。

艱は、〝扱いにくい〟という意味の菫と、根元の意味の艮との会意形声字。〝ひどくむずかしいこと〟〝なやみ〟という意味を表わしています。艱難。

難は、菫（タン）という鳥（隹）の名が本義です。羽が金色をしてとても美しく、手に入れることが大変に〝むずかしい〟鳥なので難（扱いにくい鳥）と名付けたものでしょう。今は、単に〝むずかしい〟という意味に使われています。音は菫（タン）が変化してナンになりました。困難、難問。



嘆は、〝ああ！むずかしいなあ〟と思わずロにつぶやくことです。〝なげく〟という意味の字です。嘆声はなげきの声。「感嘆」は〝すばらしいなあ〟と思わず声を出して感心すること。

歎の欠は、口で、口を大きく開いた形を象った部首です。従って、歎は嘆と全く同じ意味に使います。感歎、歎賞。

謹は、〝細かい〟〝緻密〟の意味の堇と言との会意形声字です。言葉少なに、つつしみ深くもの言うことが謹です。〝つつしむ〟と読んでいますが、行ないや心をつつしむのは「慎」で、〝言葉をつつしむ〟のは「謹」です。謹言、謹啓、謹慎（言と行ともにつつしむこと）。

僅は、〝人が少ない〟というのが本義で、今は、人に限らず、物の少ない意味に広く使われています。わずか、僅少。

饉は、〝食べ物が少ない〟という意味の字です。作物のみのりが悪く、食糧が不足する状態を「饑饉」と言います。

瑾は、きめの細かい、黄色い宝石のことです。

勤は、きめ細かに心を働かしてつとめる、という意味の字です。力は努力の力で、〝つとめる〟ことを表わす部首です。勤労、勤勉、精勤。

覲は、諸侯が勤務として、天子や将軍に謁見することを表わした字です。参覲交代というのは、江戸時代、大名が一年ごとに江戸に出て将軍に謁見することを言います。

槿は、朝、花を咲かせて、その日の夕方にはもうしぼんでしまうという、〝むくげ〟の木のことです。僅かの命しかないというので「槿」と名付けたものでしょう。「槿花一日の栄」などと、人の栄華のはかないことによくたとえられます。

召

召は、殿様が「刀を持て」と言って、小姓を〝よびつける〟ことで、刀と口の会意形声字です。殿様は、普通、「刀」と口にするだけで、小姓は殿様の前に進み出ます。この〝刀〟のトウという音がなまってショウになったのが〝召〟の音です。「行きましょう」が、幼

児のまわらない口では「行きまとう」となりますが、tō と syō とは大変通じやすい音です。ナル s の関係はよく覚えておいて下さい。召集（よび集める）、召使い。

招は、召が口で呼んでよびつけるのに対して、手でおいでおいでして〝まねく〟ことです。召が目下をよびつけるのに対して、招はお客をまねくことです。今では、召も招も、口や手に関係なく使いますが、召は目下に対し、招は自分と同等以上に対して使い分けています。招集、招待状。

詔は、人をよびつけ（召）て、命令を言いつける、という意味の字ですが、古くから天子の命令に限って使われます。「詔勅」というのは、天子のみことのりのことです。詔書。

紹は、人をよびよせて〝引き合わせる〟という意味の字です。糸はむすぶものですから、〝人と人とを結びつける〟という意味を表わしています。「紹介（状）」というように使います。

昭は、〝日の光を招き入れる〟という意味の字で、〝明るい〟〝照り輝く〟という意味に使います。

照は、灬が火の燃える様を表わす部首ですので、日や火が明るく〝てらす〟意味に使います。「照明」は、へやを電燈で明るくすることです。また、「照合」（二つの物をてらし合わせる）、「対照」などの使い方もあります。

沼は、召（ショウ）が小（しょう）の意味で、湖水の小さなものという意味の字です。〝ぬま〟のこと。

超は、〝召に応じて走りよる〟のが本義。今は「跳」と同音なので（どちらもチョウ）、〝とびこえる〟こと、またこえることから転じて〝すぐれている〟などの意味に使われています。超越、超人、超特急。

貂は、〝てん〟のことです。豸は貘の所でお話したように四つ足の動物です。さて、天子の近侍の高官を「貂蟬」と呼ぶことがあります。侍臣の冠の飾りに〝てん〟の尾と蟬の

羽とを使っていたからですが、〝てん〟の名前は、これを近侍の臣の冠に使っていたことから、召と豸とで貂と名付けたものではないでしょうか。

雚（藿）

藿は、艹（草）と隹（鳥）と口口（カン）（たくさんの口）との会意形声字。草むらで、鳥がカンカンと〝しきりに鳴く〟のが本義です。音のカンは、日本人である私たちはちょっと変に聞えますが、鳥の鳴き声を表現したものです。部首としては、〝しきりに〟〝熱心に〟〝心をこめて〟という意味に使われます。

観は、〝熱心に見る〟〝心をこめて見る〟という意味の字です。観察、観光。また、〝ながめ〟という意味にも使います。外観、壮観。

勧は、〝熱心にすすめる〟こと。力は、人の名前で〝つとむ〟と読むように〝つとめる〟（努力）という意味の字で、部首として用いられる時は、ほとんどこの意味です。勧誘。

権は、もとは木の名前ですが、その木は、枝葉が〝しきりに〟繁茂して勢いが強いので「藿の木」＝権と名付けたものでしょう。今では、〝勢いが強い〟という意味に使われています。権勢、権力。

鸛は、鳥の名前です。カンカンという鳴き声の鳥で〝こうのとり〟のことです。

灌は、水がしきりに音を立てて流れこむこと。藿は水の流れこむ音を表現しています。「灌漑」は、田畑に水を〝そそぐ〟こと。「灌腸」は、腸の中に水を〝流しこむ〟という意味の言葉です。

歓の欠は、口で、人が口を大きく開いた形を表わしています。歓はこみ上げてくる喜びで思わず〝声を出す〟ことです。おさえきれないような、とても黙ってはいられないよ

うな。〝よろこび〟のことです。歓喜、歓声。

監

監の古い形は です。臣は で、目を大きく見開いた形です。〝見張る〟のが本義で、普通は〝見張る人〟つまり〝家来〟の意味に使われます。 は人（ひと）の変形です。 は、皿（さら）に水がいっぱい入っていることを示したものです。だから監は、皿に満たした水に人が顔をうつして、それを見つめることを表わした字です。つまり、〝水かがみ〟が監の本義です。上から見おろして見なければならないので、〝見おろす〟〝部下を見張る〟という意味にも使います。監督、監視、監査。

鑑は、金属性の〝かがみ〟が本義です。鏡と同じものです。ガラス製の鏡ができるまでは、銅や鉄板を磨いて作りましたので、鑑とか鏡とかという字になりました。人は鏡を見て、初めて自分の姿が分かるので、〝反省する〟〝手本〟の意味にも使われます。亀鑑（かがみ＝手本）、年鑑。

檻は、囚人を監視するために入れておく木製の〝おり〟のことです。監視の意味の監と、材料の木とでこの字を作りました。檻（おり）は格子（こうし）で囲ってありますから、〝格子〟や〝手すり〟を檻（かん）と言うこともあります。欄檻（橋の手すり）。

艦は、海上の戦闘のために、防禦の檻（おり）を備えつけた大きな舟です。檻と舟との会意形声字です。軍艦、戦艦。

濫は、水かがみ（監）の水が〝外にあふれ出る〟という意味の字です。氾濫は、川の水が外にあふれ出ることです。転じて〝度が過ぎる〟という意味に使われます。濫用、濫造、濫読（みだりに読むということで、乱読では意味が通じません）。音は、監（カン）（kan）が変

𠂤せてラン（lan）です。k音はl音に変じやすいのです。

覧は、見おろす意味の監の省略した形〝臣〟と見との会意形声字で、〝上から下をつくづくと見る〟という意味の字です。尊敬すべき人について使います。御覧、遊覧。

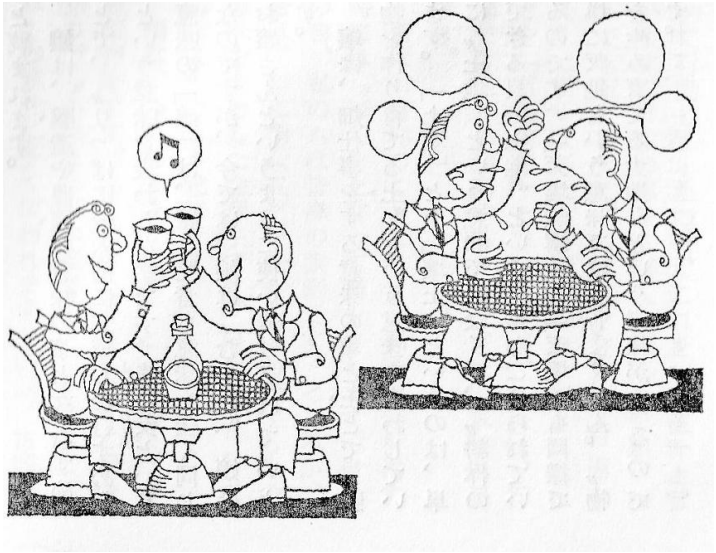
藍は、監（ラン）という名の草のことです。日本名では〝あい〟と言います。この草をとかして作った染料の色が〝あい色〟です。藍汁（あいじる）を煮つめると〝青色〟の染料ができあがります。それで、「青は藍より出でて藍よりも青し」（出藍（シュツラン）のほまれ）という諺が生まれました。弟子の方が先生よりりっぱになったことを表わした諺です。

襄（襄）

襄の古字は𧘇。衣と口（カン）と土との合字です。丄（土）は、人が土仕事をしている形です。襄（ジョウ）は、発音が「上」と全く同じなので「上（のぼ）る」という意味に使われることが多く、人名などで〝のぼる〟と読まれますが、本義は〝上衣をぬいで、ロ々にわいわい話しながら畑仕事をする〟ことです。話しながら仕事をすると、能率が〝上がる〟ので「上（ジョウ）」という音になったのかも知れません。

醸は、酒と襄との会意形声字です。〝かもす〟こと。酒がぶつぶつと言って発酵することです。〝ぶつぶつ言う〟意味の襄と、〝泡が上がる〟意味の上とどちらからでも理解できる字です。醸造（酒）。

譲は、〝ぶつぶつ言う〟意味の襄と言とでできていて〝たがいに自分の主張を思いきり言い合う〟のが本義です。酒が十分にぶつぶつ言えば、それが止んだとき、酒がりっぱにでき上がるように、人も十分に言いたいだけ言えば、自然と相手の立場がたがいによくわかりますので、〝ゆずる〟気持が自然と出てきます。譲は、今はもっぱら〝ゆずる〟意味



に使われますが、本義が主張すべきことを十分に主張することにあるのは興味深いことではありませんか。「謙譲」とは、決してただ人の言うなりになることではありません。

穣は、禾（稲）と、酒が醸造される意味の襄とで、〝稲が豊かにみのる〟ことを表わした字です。「五穀豊穣」。人名では〝みのる〟と読まれます。

嬢は、醸造や豊穣の意味の襄と女（むすめ）とで、〝りっぱに一人前に完成したむすめ〟という意味を表わした字です。良い女（よむすめ）という意味の「娘」は、嬢と発音も意味も全く同じなのですが、今では、娘は〝むすめ〟、嬢は〝お嬢さん〟というように使い分けされています。

壌は、畑仕事をする意味の襄と土とで〝穀物を作り育てる土〟という意味を表わしています。「土壌」とか「壌土」というのは、単に〝土地〟という意味ではなくて、〝耕作のできる良い土地〟という気持がこめられているのです。「天壌無窮」の「天壌」も同様で単に天地という意味ではありません。〝物を生み育てる大地〟という意味があるのです。

攘は、口々に言い合う意味の襄と手との会意形声字です。相手の意見を口でしりぞけるばかりでなく、手まで使うのが「攘」です。〝手でしりぞける〟つまり〝ばらいのける〟ことです。「尊皇攘夷」は、皇室を尊び、夷（えびす）（外国人）を日本から追い払うという意味で幕末時代に口にされた言葉です。

五

五は、 で〝片方の手〟の象形です。片手には指が五本あるところから、〝いつつ〟という意味を表わしたもので指事字です。

伍は、〝五人〟という意味の会意形声字です。軍隊では、五人をひと組とし、これを一つの単位にしました。これが伍です。この伍の長が「伍長」で、わが国の軍隊でもこの名称がありました。昔の軍隊は五人ずつ列を作って行動しましたので、これを「隊伍」と言います。日本の軍隊は四人一列でしたが、四人でも伍と言って、〝隊伍を整えて行進する〟と言いました。仲間から取り残されることを「落伍する」と言いますが、これは、行軍で隊伍から脱落するという意味の軍隊用語です。

吾は、自称のことばです。普通自分を指す時には〝ぼく〟と言って鼻をさします。自分の自、私の厶は皆鼻の象形です。ところが、吾は、口に指（五）を加えて〝わたくし〟の意味を表わした会意字です。口を指さして〝ぼく〟と言う意味です。

語は、〝われ（吾）言う〟という意味の会意形声字です。〝ものがたる〟ことです。物語り。〝かたる〟が本義ですが、今は〝ことば〟の意味に多く使われます。国語、古語、語源、標準語。

悟は、〝われを認識する〟ことで、吾（われ）と心との会意形声字です。人間は他人のすることはよく見えて、そのよしあしはかなり公平に判断できますが、自分の姿は見ることができないように、自分の行為はとかく利己的に陥りがちです。そこで、心の鏡によくわれをうつしてみることが大切です。心の鏡に吾がよくうつった時に、これを悟（さとる）と言うのです。真の吾を、わが心に理解することです。

寤は、寝（ねる）の意味の寸と吾とで、〝ねむりからさめて吾にかえる〟という意味

を表わした字です。〝さめる〟ことです。「寤寐（ビ）にも忘れぬ」とは、〝寝（寐）てもさめても忘れない〟という意味のことばです。

及（𠬝）

及は、𠂇（𠂇）と又（𠂇）の合字です。𠂇は人の象形、又は手の象形です。前を行く人をうしろからつかまえとどめようとする形の字です。〝追いおよぶ〟のが本義で、〝手がとどく〟ことから〝ひきよせる〟の意味に使われます。追及、普及、及第。

汲は、〝ひきよせる〟意味の及と水とで、〝水をくむ〟意味を表わした会意形声字です。汲水ポンプ。井戸のつるべで水汲みをする時は、汲むのとあけるのと引き続いて次々と忙しく続くので、〝忙しい様〟を「汲々」と言います。

吸は、〝口で物をひきよせる〟という意味で〝すう〟ことを表わした字です。すえば、物が口にひきよせられるから、口と及とで、〝すう〟こと を表わしたのです。呼吸、吸収（すいとる）、吸入。

笈は、〝うしろからおう〟意味の及で〝背負（お）う〟意味を表わし、竹は、竹製の箱（箱は元来竹製のはこ）を表わし、〝書物を入れる背負い箱〟 のことを表わしました（木製の負い箱は板と書きます）。他郷に勉学に出ることを「笈を負う」というのは、他郷に遊学する者はこれに書籍を入れて旅立ったからです。

扱は、〝ひきよせる〟意味の及に、さらに手を加えて、〝物を手で取りあつかう〟意味を表わしたものです。

級は、〝品分けされた糸〟が本義ですが、今では、糸に関係なく、広く〝品分け〟〝順序だて〟という意味に使われます。はた（織機）を織るには、糸を品分けし、順序立てて

おいて、扱いやすいようにしておかなければなりません。そこで、〝とり扱う〟意味の及と糸とで、〝品分けされた糸〟という意味を表わしたのです。

急は、追及の意味の及と心とで、〝追及する時の心〟つまり〝いそがしい〟気持を表わしたものです。**刍**は及の変形したものです。

𢦏

𢦏は、**𢦏**で才（サイ）と戈（ほこ）との形声字です。才は、〝断ち切る〟意味を表わした言葉です。従って𢦏も、〝断ち切る〟が本義の部首です。音は才（サイ）（切（さい））です。

裁は、衣類を作るべく、布を〝断ち切る〟のが本義の字です。「衣類の裁断」「裁縫」（布を断ち、縫（ぬ）うこと）がこれです。デザインから裁断までは、変更がききますが、一旦裁断してしまえば、変更はできなくなります。そこで〝最終的な決着をつける〟ことを「裁断」と言うようになりました。裁断（さばく）、決裁（とりきめる）、裁定などは、この意味のことばです。

栽は、木をりっぱに育てるべく、むだな枝を〝断ち切る〟のが本義の字です。転じて、〝木を植える〟意味にも使います。栽培。

哉は、国語の「何と楽しいことか」とか「行こうか」のように、文末にあって、詠嘆や疑問の気持を表わす終助詞で、サイというその語の音を表わす部首𢦏に、表意の口を加えて作った形声字です。哉の字形がここで〝言葉（口）が断ち切れる〟という意味を表わしています。

戴は、〝別々になる〟意味の異と𢦏との会意形声字で、〝断ち切って別々にする〟ことから断ち切られたものが上へ上へと〝つみ上げられる〟意味を表わしています。また〝上

にのせることから〝いただく〟「会長に〇〇氏を推戴する」というようにも使います。音はサイ→タイ→ダイ。(s) → (t)

載は、〝上にのせる〟意味の戴の省略した形の𢦏に車を加えて〝車の上にのせる〟ことを表わしたものです。今では、車に限らず、舟または書物にのせる場合にも使います。「積載（量）」「満載」→「記載」「掲載」。

截は、取った雀を焼き鳥にすべく、首を〝断ち切る〟ことを表わした字です。隹（鳥）と𢦏（切断）の会意字。音は、切る意味から「切（セツ）」です。截断、直截。

戠

戠は、音と弋（ヨク）で地上に立てた目じるしにする木の枝の象形で〝しるし〟の意味の部首）との会意形声字で、〝境界をはっきりと示すために設けられた、国境であることを明書した碑の類〟を言います。音は、ことばを意味し、また〝文字〟をも意味します。

部首としては、〝物事を明瞭に区別する〟意味に使われます。音は弋（ヨク）。

職は、〝耳で、物事をはっきりと聞き分ける〟ことが本義です。これは（民の声を聞くということ）役人として最も大切な〝仕事〟なので「役職」（しごと）というように使われるようになりました。今では、職は、〝職業〟というように、ほとんど〝しごと〟の意味に使われています。音は耳と戠（ジ ヨク）でショク。

識は、〝言葉のもつ意味をはっきりとさせる〟ことが本義です。言（シン）と戠（ヨク）との会意形声字で、音はショク、転じてシキ。知識、博識。〝物事を見分ける〟〝みとめる〟識見。認識。また、単に「戠」の意味〝しるし〟という意味に使うこともあります。標識。

織は、〝しるしのつけられた糸〟という意味の字で、〝布をおる〟という意味に使われ

ます。はたをおるためには、糸にしるしをつけ、一本一本がはっきりと分けられて張ってなければなりません。〝しるし〟と〝分ける〟意味とをもつ戠（ヨク）と糸（シ）とで、〝はたをおる〟意味を表わしました。音は糸（シ）と戠（ヨク）でショク。総じて漢音で（yoku）の音は、呉音では（iki）です。織（ショク）機、紡織、組織（はたをおるための〝手順〟〝組み立て〟という意味）。

幟は、〝しるしの書いてある布（巾）〟という意味の字で、〝のぼり〟のことです。「旗幟」は、昔の戦争に武士が用いた〝はたじるし〟です。織の音はシです。

熾は、〝明瞭〟の意味の戠と火とで、〝火のあかあかと盛んに燃える〟ことを表わしています。熾烈（シレツ）。

寸

寸の古い形は、𠂇で、手の象形に、脈所の位置を示した・のしるしを加えた指事字です。手首から脈所までの距離を、短い長さをはかる時の単位とし、これを「寸（スン）」と言いました。一寸法師というのは、この長さです。一寸の十倍を一尺と言い、十尺を一丈（ジョウ）と言います。また一間（ケン）（畳一畳（ジョウ）のたての長さ）というのは六尺です。

寸は、部首としては、多くは〝基準〟〝きまり〟の意味で使われます。また、単に〝手〟（又）の意味に使われることもあります。

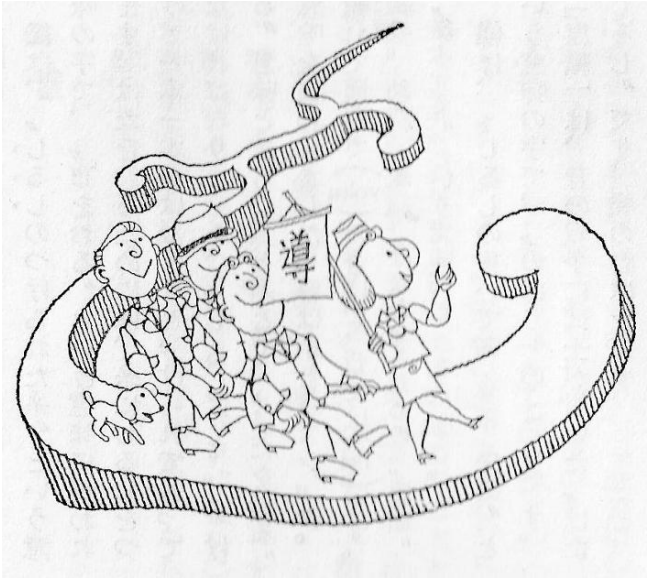
寺は、士（シ）と寸との会意形声字です。士は〝役人〟のことですから、寺は、役人がきまりに従って、物をとりきめるところ、つまり〝役所〟が本義です。中国に初めて仏教が伝来した時、僧に役所を住居として与えたので、僧のいる所を「寺」と呼ぶ習慣が生まれまし

た。そして、僧院がもっぱら「寺」と呼ばれるようになりますと、寺は役所の意味には次第に使われなくなりました。音は士（シ）または士（ジ）です。

侍は、寺、つまり役所に勤める人という意味の字です。今の官公吏に当たることばですが、日本の昔では〝武士〟（さむらい）に当たりますので〝さむらい〟と読んでいます。また、侍は君側に〝はべって〟奉仕するので〝はべる〟〝ざぶらう〟意味にも使われます。侍従、侍臣、侍女。

討は、〝きまり（寸）に従って議論（言）することです。「討議」「討論」は、ルールに従って、相互に自己主張をし、また相手を攻撃します。この場合、相手の諭旨の欠点をすばやくとらえて、そこを攻撃することが大切です。そこで〝攻撃する〟〝攻める〟という意味にも使われます。討伐、征討。

導は、〝頼るべき基準（寸）に従って、人を道びく〟ことです。思いつきや、いい加減な考えで行なう「指導」は、導の本義にもとります。ガイドさんが、一定のコースを案内し、一定の解説をしています。これはりっぱな「導」です。誘導、先導、教導。



尊は、〝酒を入れた酒器を捧げ持って、神または貴人にそなえる〟ことを表わした字です。古い字形は酋で、両手で酒がめを捧げている形になっています。酒を供えるのは相手を〝たっとぶ〟心の表われであるところから〝たっとぶ〟という意味を表わしたものです。音は寸（スン）が変化して

ソン。尊敬。

わが国では、神や貴人に対する敬称として「尊」の字を用い、これを「みこと」と読ませています。日本武尊。

樽は、酒を入れる木製の容器、つまり〝たる〟のことです。

尋は、ヨ（ヲで手の象形）とエ（左の省略した形）とロ（右の省略した形）と寸（単位）との会意字。つまり**𠦪**は、両手を広げて伸ばした時、左手の指先から右手の指先までの長さを、やや長い距離をはかる時の単位とし、これを尋としたのです。わが国では、これを、両手を広げるところから〝ひろ〟と言いました。「ちひろの海原」というのは、「千尋（ちひろ）」の意味で、大変に深いという意味ですし、「千尋の谷（センジン）」というのも、大変に深い谷という意味のことばです。

射は、古い字形は[illegible]で、弓に矢をつがえた形に手がそえられています。まさに〝弓をいる〟ことを表わした字です。後に、弓に矢をつがえた字形が、身に似ている所から、誤まって今の字形になったものです。「[illegible]」という字体にでも改めたらどんなものでしょうか。

専は、古い字形は[illegible]で、手に[illegible]（糸まきの象形）を持った形を表わしています。〝子供が糸まきをひとりじめして手から離さない〟という意味の〝独占〟を表わしています。〝もっぱら〟専門。専心。専属。専任。専用。

守は、きまりの意味の寸と家との会意字で〝家によくきまりが行なわれている〟という意味の字です。〝きまりをまもる〟ことです。

寺

寺については、前の寸のところでお話しました。〝役所〟が本義です。しかし、これが部首として使われると〝基準〟の意味に用いられることが多いようです。

時は、〝とき〟の意味を表わす日と、〝単位〟の意味を表わす寺との会意形声字で、〝ときの単位〟を表わしたものです。むかしは日の動きでときを計りました。今のように、一年を通じて長さの一定したときというものは考えられませんでした。日が地平線に見えた時を〝明け六つ〟と言い、地平線に沈んだ時を〝暮れ六つ〟と言って、その間を、今のほぼ二時間ほどの長さで六つに分け、それを〝ひととき〟としました。ですから、夏と冬とでは同じ〝ひととき〟でも長さにかなりの違いがあったのです。名称は今の十二時が九つ、二時が八つ、四時が七つ、六時が六つ、八時が五つ、十時が四つです。二時から四時までの八つ時に取る中食を〝お八つ〟と呼んで、これが今でも言葉として残っているわけです。

お寺で、日の出、日没に、六つの鐘をついて〝時〟を知らせたというのは偶然ですが、うまく合っていて、大変におもしろいことではありませんか。

持は、〝きまり（寺）を手にもつ〟という意味で、〝まもる〟ことを表わしています。護持。それは長く続けなければなりませんので〝たもつ〟意味にもなります。持続、保持、持久力。普通には、単に〝手に物を持つ〟の意味に多く使われます。

詩は、〝きまりのある言葉〟という意味の字で、文章の表現の上に、一定のきまりがあるものを言います。たとえば、漢詩のように、また和歌や俳句や新体詩のように、字数やその他表現上にそれぞれ一定の約束があるのが〝詩〟という字の持つ意味です。今では、字数などの上に形式的な約束を一切持たない、詩的内容だけを重んずる詩が盛んになって

いますが、これでは、文字の上からは〝詩〟ではなくなっているわけです。

恃は、心に、一定の頼るべき基準が確立していて、心が安定していることを表わした字です。〝心に頼むところがある〟という意味で、〝たのむ〟という訓があります。同じ〝たのむ〟意味を持つ「怙」と合わせて「怙恃する」というように使います。また、「怙恃」を〝父母〟の意味に使うのは、「父無くば何をか怙(たの)まん、母なくば何をか恃まん」という詩経の句に由来するものです。矜恃(キョウジ)（自信と誇り）は、よくキンジと読み誤まられて使われることばです。

等は、〝竹簡（竹ふだ）をきまり良く整理する〟という意味で、〝順序だてる〟のが本義の字です。「一等」「二等」というように、順序だてることから、〝段階（等級）〟の使い方が生まれました。昔、紙のない時代は、竹か木の札にうるしで字を書き、このふだをなめし皮（韋）でつなぎ合わせ、巻き物にしました。今でも、書物に一巻二巻という名前のあるのはその名残りです。孔子が熱心に読書したため、「韋編三たび絶(た)つ」と言ったのは、この簡をとじた韋がたびたび巻いたり開いたりしたために切れたことを言うのです。それにしても、今の書物に比べて大変にかさばるので、整理には頭を悩ましたことでしょう。

特は、〝祭礼の犠牲のために、役所（寺）に飼われている牛〟という意味の字で、〝犠牲用にとくべつに飼育されている牛〟というのが本義です。とくべつの牛なので、今では〝とくべつ〟という意味に使われることの多い字です。特別、特定、特質、特権、独特。

待は、〝役所（寺）に行（彳）く〟という意味により、〝役所に願い出てその処置をまつ〟ことを表わした字です。

役所という所は、民の声や訴えを聴く所（廳→庁）ですが、昔から無能な者が多く役人になると見えて、人を待たせたらしいですね。

なぜなら「役所（寺）に行くとかければ、〝待たされる〟と解ける」からです。

方

方は、耕作に使う〝すき〟の象形字ですが、今は、〝方法〟（読み方、書き方の方）という使い方と、〝四方〟（四つの方角）という使い方と〝四角〟という使い方が多く、本義には全く使われません。方形（四角形）、正方形、長方形。

防は、阝と方との会意形声字です。阝は崖のしるしの部首ですから、〝四方を崖で囲む〟という意味になります。つまり、外敵から守るための土手を周囲に築いて〝ふせぐ〟という意味の字です。防壁、防禦、防衛。

坊は、本来防と同じ意味の字で、外敵をふせぐための土の防壁や、水をふせぐために土を積み上げて作った堤防が本義の字です。転じて〝防壁で囲まれた建物〟を坊と言うようになりました。僧の居室を「僧坊」というのはこの意味とも取れますが、また「僧房」の意味とも取れます。僧坊の主（あるじ）を「坊主（ぼうず）」と言うのですが、今は単に僧の意味に使います。「坊ちゃん」というのは、子供は髪の毛を僧のように短く刈っているために起こった呼び名です。

妨は、〝四方に女がいる〟ということで、女に囲まれては、仕事が〝さまたげられる〟という意味の字です。気が散って、確かに仕事にならないでしょう。妨害、妨止（防止と意味が違うことに御注意ください。人の仕事の邪魔をして、させないことです）。

紡は、まゆの糸を何本も合わせて一本の糸により上げること、〝つむぐ〟ことを表わした字です。細糸の糸まきを四すみに置き、四方から一緒に引いてより合わせますので、方と糸とで表わしました。〝つむぐ〟ということばは、つむ（錘）という重りを使ってより

合わせるところから生まれました。「混紡」は、つむぐ時、同じ種類の糸でなくて、異った種類の糸をまぜて使ったものという意味です。

肪の方は、〝四方〟つまり〝まわり〟の意味。〝体のまわりの肉〟ということで、〝あぶら肉〟を意味しています。ついでに言いますと、「脂肪」の脂は〝旨い肉〟という意味の字で、あぶら分の多い肥えた肉のことを言います。旨の日は口の中に食べ物のはいっている形です。

彷は、あっち（彼方）へ行ったり、こっち（此方）へ行ったりして、行く方角がはっきりしていないという意味の字で〝さまよう〟ことです。彷徨。また〝はっきりしていない〟ことから〝ぼんやり〟の意味にも使われます。

芳は、〝あたり（四方）一面が草花におおわれている〟という意味の字で、〝美しい〟という意味に使われます。芳香、芳草。また「芳志」「芳名」というようにも使われます。

訪は、〝あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしてたずねる（言）〟という意味の字です。歴訪、訪問。

放は、古い字形は亻で人と攵との合字になっています。攵は、手に棒とか鞭とかを持った形で、従って、放は〝棒をふるって人を追いはらう〟という意味の字です。音は攵が変化してホウになり、その音から〝攵〟が〝放〟と書かれるようになったものでしょう。追放、放伐。

「放浪」は、追い放たれて、あちこちさまよい歩くのが本義ですが、今は〝気ままに歩きまわる〟意味に使われます。そのため〝勝手〟〝気まま〟の意味に使われることが多くなりました。放歌、放言、放縦、放蕩。

畐

畐は、酉で〝りっぱな酒どっくり〟の形を象った字です。部首としては〝りっぱな財産〟の意味に使われることが多いようです。音はフク。

富は、畐と家（宀）との合字です。りっぱな酒器のあるような家は裕福な家にきまっていますので、畐と宀とで〝どみ〟を表わしました。音は畐（フク）ですが、短かくフと発音します。

福は、畐と神（礻）との合字です。〝神様から授けられたとみ〟という意味の字です。目に見える物質的な財産に対して、目に見えない精神的な財産を言います。目に見えない神の授ける財産は、やはり、目に見えないわけです。幸福、福祉（祉は、神が止まるの意味で幸いが舞い下ることです）。

副は、財産（畐）を二つに分（刂）けるという意味を表わしています。刂は刀（かたな）の変化した形で、部首としては多く〝切る〟という意味に使われます。副の本字は「䚄」で、沢山ある財産を二つに分けて、半分しかないものとして使い、片方は万一に備えておく、副は、その〝ひかえ〟という意

味を表わしている字なのです。だから、「副会長」というのは、会長のひかえであって、会長に万一があった場合に備えておくというのが本義です。後には「副弐」というように、〝次〟〝二番め〟という使い方も生まれしたが、本来は、そういう意味の字ではなく、どこまでも万一に備える〝予備〟という意味です。ですから、副会長には副会長としての特別の職務はないのがほんとうです。「副本」は本来の用法で すが「副読本」はそうではありません。

幅は、巾（布）と畐とで〝たっぷりと豊かな布〟という意味を表わしています。つまり、〝はば〟の広い布という意味です。タオルなども安いものは幅がありません。幅は、〝はばかある布〟が本義で、今は単に〝はば〟という意味に使います。幅員。

輻は、〝ぜいたくな車〟という意味の字で、車輪が木を輪切りにして作ったものではなくて、⊛のようになった車輪を備えつけた車を指しています。今はこの車輪の中心と輪の周囲とを結ぶ放射線状の沢山の棒を輻（和名はや）と言うのです。この輻のある車輪を〝輪〟というのであって、輻のない、つまり木の輪切りにしたような板の車輪は〝輇〟と言って正しくは〝輪〟とは言わないのです。「輻射」とは、車輻が一点から四方に放射する様子をたとえて言ったことばです。太陽の熱の伝わり方を輻射熱というのはこれです。輻はわが国では〝矢〟と言うので、それに関係のある〝射る〟を使って「輻射」と言ったのです。

復

復の古い字形は𡘇で、旨は、二つ重ねたような形をした酒器の象形です。夂は、止（足の裏の象形）をさかさにしたものの変形です。復は、復の本字で、〝同じ道を重ねて行く〟

という意味の字です。旨が〝重ねる〟という意味、夂が〝歩く〟意味を表わしています。今では复つまり〝重ねる〟という意味の部首として用いられています。

複は、〝布を重ねて作った着物（衤）〟という意味の字です。わが国では、〝合わせ〟と言います。夏の着物〝ひとえ〟は「一重」という意味のことばですが、複衣に対して「単衣」と書きます。今では、単を英語のシングル、複をダブルの意味に使うことがあります。また、衣類に関係なく、広く〝重なり合う〟〝こみあう〟という意味にも使います（〝合わせ〟のためには別に袷という字が作られました）。複雑、重複。

腹は、〝肉体のなかで、最も多くの器官が重なり合っているところ〟という意味で、月と复とでできています。〝はら〟には腸が重なり合っているからです。心の中に持っている考えを「腹案」というように〝心〟の意味にも使います。

復は、〝一度通った道を重ねて行く（彳）〟という意味の字で、〝かえる〟ことを表わしています。行きに通った道を通ってかえるのが復なので、別の道を通って帰ったのでは復とは言えません。今では道に関係なく、〝物事をくり返す〟〝もと通りになる〟という意味に使います。復習、回復、復旧、復活。

馥は、〝行ったり来たりする〟意味の复と香とで、〝良い香がただよう〟という意味を表わしています。馥郁たる香気。

覆は、包みおおう意味の襾に復を加えた会意形声字。襾は上からと下からとで物をおおい包む形を表わした部首です。おおいは取っても、必ずまた付けるので、復の意味と音とを加えて覆としたのです。

包

包は、勹と巳との合字です。勹は、冫で人が物をだきかかえている形です。巳はおなかの中の赤ちゃんの象形です。従って、包は〝子供が腹の中につつまれている〟形で、〝つつむ〟という意味を表わしています。包装、包容（〝包み入れる〟ことから〝度量〟の意味）、包含。

抱は、扌（手）と包とで、〝手で包む〟つまり〝だきかかえる〟意味を表わしたものです。抱擁。「抱負」は、抱いたり、背負ったりすることが本流ですが、〝心に抱く望み〟という意味に使われています。

飽は、〝赤ちゃんがおなかの中にいる〟意味の包と食との会意形声字です。〝食べ物を沢山食べて、おなかがふくらむ〟という意味で〝あきる〟ことを表わしたものです。「飽食暖衣」とは、飽きるほど食べ、着物は暖かいほど沢出身につけることで、ぜいたくな生活をすることを表わしたことばです。

砲は、石を包んで、それをはじきとばす武器のことです。わが国では、これを〝石ゆみ〟と言いました。その大じかけなものが〝大砲〟です。今では、火薬の力で鉄の弾丸を打ち出す武器の名前になりました。

鞄は、革（なめし皮）で作った、物を包むための物という意味で、〝かばん〟のことを表わした日本製の漢字です。

胞は、〝赤ちゃんがおなかの中にいる〟意味の包に月を加えて、〝胎児を包む肉膜〟という意味を表わしたものです。人は胞から生まれますので、「同胞」というのは、同じおなかから生まれた。〝兄弟〟という意味になります。また、生殖の働きを持つものに、この胞を用いることがあります。胞子、細胞。

泡は、〝空気を水で包んでいる〟という意味で、〝あわ〟を表現したものです。あわは消えやすいので、降って消えやすい春の雪のことを「泡雪」と言います。

庖は、家の意味を表わす广と包とで、〝食物を包みおさめておくへや〟という意味を表わしています。〝台所〟〝調理場〟のことです。「庖丁」は、調理用の刃物という意味です。

疾は、泡つぶの意味の包と病気の意味の疒との会意形声字です。体じゅうに、水泡のようなはれもののできる病気、〝天然痘〟のことです。あとで、（きず）瘡が残るので、昔はこれを「疱瘡」と言いました。

袍は、〝中に綿を包んである着物〟という意味のことばで、俗に言う〝綿入れ〟のことです。

鉋は、〝中に金を包んである大工道具〟という意味の字です。かんなは、刃が本の台の中にはめこまれているので、鉋という字で〝かんな〟を表わしたものです。

者

者の古い形は、で、容器からはみ出るほど〝ものがひどく、たくさんある〟ことを表わした字です。今は、〝もの〟という意味と、〝ひどくたくさん〟という意味と二つに分かれて使われています。つまり、単独に使われる時は〝もの〟で、部首として使われる時は〝たくさん〟という意味に使われるのです。音は部首としては、sha→sho→tyo→to（シャ ショ チョ ト）と変化して使われています。

煮は、火が燃える意味の灬と、〝ひどい〟という意味の者との会意形声字で、〝どんどんと火を燃やす〟という意味で〝にる〟ことを表わしたものです。「煮沸（フツ）」は煮（に）て沸（わ）かす

という意味のことばです。音は者（シャ）。

奢は〝ひどい〟という意味の者と威張る意味の大との会意形声字です。大は、手足を広げて力んでいる形ですから、〝威張る〟いう意味があります。それで、「あいつ、大きな顔をしていやがる」などというわけです。〝ひどく威張る〟〝度を越して見えを張る〟という意味の字です。音は者（シャ）です。豪奢、奢侈（シャシ）。

暑は、日（太陽）と、〝ひどい〟という意味の者との会意形声字です。〝太陽がひどく照りつける〟という意味で、〝あつい〟ことを表わしたものです。同じ〝あつい〟のでも、湯のあついのは、火のしるしのついた「熱」です。暑い⇔寒い。熱い⇔冷たい。音は者（ショ）です。酷暑（コク）、残暑（ザン）、避暑（ヒ）。

諸は、〝ひどく言葉が多い〟という意味の字ですが、今では単に〝多い〟という意味に使われて〝もろもろ〟などと読まれています。「諸国」は〝もろもろの国〟〝多くの国〟ということです。諸君、諸侯、諸将。音は者（ショ）です。

著は、〝ひどく草がしげる〟という意味の字ですが、これも今は草に関係なく、物事の〝ひどい〟〝いちじるしい〟という意味に使われています。また〝目立つ〟〝表面にあらわれる〟ことから〝あらわす（本を書く）〟という意味にも使われます。顕著、著明、著名、著述。

署は、網の意味の罒と、〝たくさん〟の意味の者との会意形声字です。〝網の目のようにこまかく手分けする〟という意味の字です。〝手分けする〟〝配置する〟という意味に使います。部署、署置。また、〝役所〟の意味にも使います。警察署（仕事を細かく手分けして、しかも網の目をはったように緊密な連繫を取って犯人を捜査する役所）。

薯や藷は、いもがひと所にたくさん集まってできるところから、署（諸）と艹とで表わしたものでしょう。甘薯、甘藷（甘いいもという意味の字です。さつまいもというのは、

わが国における原産地が薩摩の国、今の鹿児島県だったからです）。

緒は、同音の初の意味の者と糸との合字です。〝糸の初〟つまり。〝糸口〟を表わした字です。音は初ですが、誤って著と読まれることが多いようです。端緒、緒言、緒論、由緒（血すじ（統）の意味）。情緒（喜怒哀楽の糸口という意味のことば。今ではほとんどジョウチョ読まれています）。

渚は、緒（初）と同じ意味の者と水との合字で、〝水のいとぐち〟という意味の字です。陸地から水にかわる波うちぎわ、つまり〝なぎさ〟のことです。水ぎわ→みぎわ。

曙は、緒（初）の意味の署と日との合字で〝太陽の糸口〟という意味の字です。〝夜明け〟を表わしています。太陽が地平線に姿を現わしかけた状態が曙です。この字は〝あけぼの〟と訓じられています。これは〝ほのぼのとあけ初める〟という意味のことばです。曙光は、〝あけぼのの日の光〟ということですが、今までの暗黒を破って、光明に満ちた世界になることを約束していますので、〝良いことの起りかかる兆（きざし）〟という意味によく使われます。

都は、〝ひどくたくさん〟という意味の者と阝との会意形声字です。阝は〝へん〟の場合は崖ですが、〝つくり〟の場合は、邑の意味になります。阝は邑の省略変形したものです。都は、〝たくさんの邑を含んだ大きな町〟という意味で〝その国の主権者の住むみやこ〟を表わしたものです。単に〝大きな町〟の意味にも使われます。音は者です。首都、国都、都市、都会、都邑。

箸は、者の本義に竹を加えた会意形声字で、〝容器に盛られた物をつまむ竹ばし〟という意味の字です。昔の箸は、一本の竹を湾曲させて、〝〟のようにし、今のピンセットのようにして物をつまみました。その様手が、鳥のえさをついばむ〝口ばし〟に似ているので〝はし〟と呼んだものです。昔は、口ばしのことも、単に、〝はし〟と呼んでいま

した。

辰

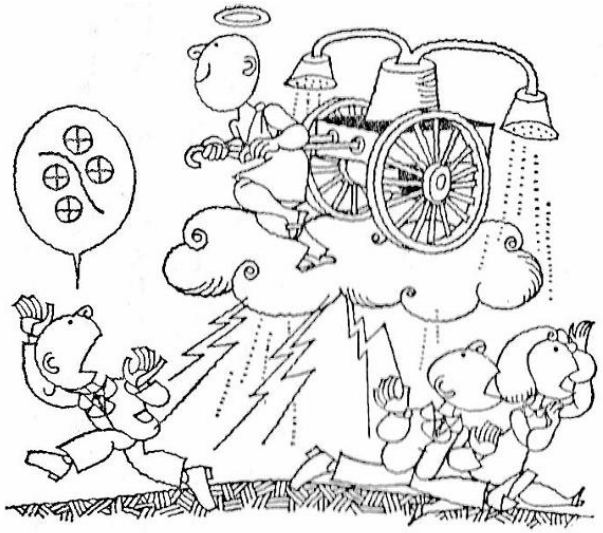
辰は、原形ははまぐりが貝殻から足を出している形を象った象形字ですが、今は貝の意味には全く用いられません。その代り、辰と虫との合字である蜃が、〝はまぐり〟という意味を表わしています。

辰は、十二支の第五位として用いられたため、方角や時刻、年月日を表わすのに使われて、「時」や「日」の意味によく使われています。「良辰」は〝良い日〟という意味、「辰刻」は〝時刻〟という意味です。「星辰」は星という意味ですが、「三辰」は、日と月と星との三つを含めた意味になります。部首としても、一定した意味に使われないので、ちょっとやっかいな字です。音はシンです。

晨は、〝日が辰の方角（子が北、午が南で、この間を六つに分けて、順に〝丑寅卯辰巳〟となりますので、東からわずかに南に片寄った方角です。ついでに言いますと〝子午線〟というのは、地球を南北に結ぶ線、という意味の字です）にあるころ〟という意味で、太陽が出てまだ間もないころ、つまり〝朝〟を表わした字です。

震は、雷と同義の字です。雷の訓の〝かみなり〟は〝神鳴り〟の意味ですが、漢字の「神」も本義は実は雷なのです。雷の古い字形は で、⊕は車輪の形です。雲の上で、天の神様が車を引き回している音が雷鳴（神鳴り）だと考えられていたのです。雷は雨を伴うので、後に雨が付いたものです。また、⊕も一つに省略されました。

電は、雷から出る〝いなずま〟を表わした字です。古い字形では、やはり雨はありません。神の申が、この電の申と同じ〝いなずま〟を表わした字です。つまり、神は、いな



ずまによって、天にある〝かみ〟を表わした字なのです。ついでに言いますと、**神**は、天の神で、地の神が社です。社は、〝土地の神（礻）という意味の字です。「社会」は、この土地の神（社）を中心に人々が集合（会）〟して作られるので「社会」と言うのです。

震は、神（シン）の意味の辰と雨とで作られた、〝かみなり〟が本義の字なのです。雷鳴は大地をびりびりとふるわせますので、〝ふるわせる〟意味が生まれました。「地震」というのは、雷鳴によって生ずる震動のことを言うのです。中国にはないのですが、わが国では、今私たちが「地震」と呼んでいるものが多いので、用法が中国と変わってしまったのです。

振は、震の意味の辰に手を加えて、〝手をぶるぶるふるわせる〟意味を表わしたものです。〝手をふる〟が本義ですが、今では、手に関係なく使います。振動、振興（ふるいおこす）。

脣は、震の意味の辰に肉を加えて、〝ぶるぶるふるわせることのできる肉体の部分〟つまり〝口びる〟を表わしたものです。

唇は、よく脣の意味に使われますが、本義は〝驚いて口から大声を出す〟ことです。今は、脣の代りに使われています。

娠は、胎児がおなかのなかで動く意味を表わす辰と女とで、〝はらむ〟ことを表わした字です。妊娠。

賑は、財貨（お金）の意味を表わす貝と、動く意味を表わす辰との会意形声字で、〝お金が動いて景気が良い〟という意味を表わしています。〝にぎわう〟こと。殷賑。また、貧困な人々に金品を与えることをも言います。賑恤（ジュツ）（にぎわす）、賑救。

蜃は、辰の本義である〝はまぐり〟と虫との会意形声字です。やはり〝はまぐり〟の意味を表わしていますが、また、想像上の動物「竜」の一種〝みずち〟をも言います。「蜃気楼」とは、この蜃がはき出す気によってできる空中の楼閣であるとの考えで名付けられたものです。

果

果は、木で木の上にくだもののなっている形を表わした字です。〝くだもの〟が本義の字です。種が芽を出し、木になり、花を咲かせ、最後に実を結びます。だから、果は〝最後〟〝はて〟の意味に用います。また、〝はたす（仕とげる）〟という意味にも使います。「結果」は、〝実（ミ）（果実（ジツ））を結ぶ〟という意味の言葉ですが、〝原因に引き継いで起ること〟の意味に使われます。仏教では、この〝原因結果〟を簡単に「因果」と言っています。「果報は寝て待て」の「果報」は、因果応報の意味で、〝よい因をなせば、求めなくてもひとりでによい果となって報いられる〟ということですが、今ではよい因をなすことが忘れられて、果報が、単なる〝幸運〟の意味に取られているのは残念なことです。

菓は、果が、〝はたす〟など別の意味に転用されるようになったため、〝くだもの〟を表わす字として、新しく作ったものです。「菓子」は、〝くだもの〟の意味のことばですが、今ではケーキ類の名称になってしまいました。今でも、「水菓子」という言い方は残っています。

課は、〝はたす〟の意味の果と言との会意形声字です。〝仕事を果たすように言いつける〟ことが本義です。「課題」は、果たすように言いつけられた問題ということです。〝仕事を割りあてる〟こと。また〝割り当てられた仕事〟。日課。音は果（カ）。

夥は、〝果実が多く木になっている〟という意味の字で、広く〝物の多い〟意味に使われています。おびただしい。音は果。

顆は、頭の意味の頁と果との会意形声字。〝頭のようにまるい果実〟という意味の字です。音は果。

踝は、足首の両側にある、果実のように丸くふくらんだところ〝くるぶし〟を表わした字です。音は果。

裏は、果実を着物（衣）の中に〝つつむ〟ことを表わした字です。裏という字に似ていますが、全然違います。〝つつむ〟こと。音は果。

裸は、つつまれていた果実（裏）が着物の外に出ている形ですから、〝むき出しにする〟という意味になります。転じて、今では、着物を脱いで〝はだか〟になる意味に使われているのは、ネのついた字だけに当然のことでしょう。音は果（カ）が変化して、ラになりました。裸体。

「裸子植物」は、松、杉などのように、胚珠（ハイシュ）が子房で包まれずに、外に出ている植物のことです。「被子植物」に対するものです。

未

未は木で、まだ木（果）のように大きくならない、つまり〝未熟〟な果物の形を表わした字です。〝未熟〟ということで〝まだ……ない〟という意味に使われます。音はミ

が呉音、漢音はビ。未完成、未来、未知、未納、未開。「未亡人」は、〝まだ亡(な)くならない人〟という意味で、夫を失った婦人が自分を謙遜して言うことばです。「〇〇未亡人」とよく言われていますが、本義からすれば、早く死ねと言っているようで、大変に失礼な言い方です。

味は、未熟な果実を、「もう食べられるかな」と待ち遠しく思って〝あじをみる〟意味の字です。未熟な果実を表わす「未」に口を加えてあじを表わすとは、なかなかあじのある表現ではありませんか。味覚、珍味。「味方」は「身方」の意味のあて字です。

妹は、未熟な意味の未に女を加えて、〝未熟な女〟ということで、〝いもうと〟という意味を表わしたものです。音は未の変化したマイです。i(イ)がよくアイに変化するのは、英語の場合と全く同じことで、興味あることです。

mi(ミ)→マイ　si(シ)→サイ　ti(チ)→タイ　ki(キ)→カイ

未→妹　思→細　治→胎　記→改

milk(ミルク)→mile(マイル)　signal(シグナル)→sign(サイン)　tick(チック)→tie(タイ)　king(キング)→kite(カイト)

昧は、日(太陽)が未熟である。つまり、〝まだ空に日が上がらない〟ことを表わした字です。〝くらい〟という意味に使われています。音はマイです。また、〝はっきりしない〟〝ぼんやり〟〝愚か〟の意味にも使われます。曖昧、蒙昧。

寐は、寝るという意味の■と、未熟の意味の未との会意形声字で、〝未熟な睡眠〟という意味を表わしている字です。〝うたたね〟〝まどろむ〟という意味の字です。熟睡ではなくて〝浅い眠り〟のことです。寤寐(寤は吾の項参照)。

魅は、未熟という意味の未と鬼との会意形声字で、〝未熟な鬼〟つまり、人間とも鬼ともつかぬ〝ばけもの〟を表わしたものです。音は未(ミ)です。人間のかっこうをして人に近づき、人をあやしげな力で惑わすということです。これが「魅惑する」ことであり、そのあ

やしげな力が「魅力」なのです。魑魅魍魎。

曼

曼は、冒ボウと又（手）との会意形声字です。冒は、帽子の本字で、上の冒が帽子の象形です。下の目は、目の所まで〝目深くかぶる〟という意味で付けたものです。従って、冒は防寒用の帽子と思えばよろしいでしょう。寒い時には、少しでも多く顔を包みたいので、やっと目が見える所まで帽子を下げるものです。歩いているとだんだんずり下がってきて、目が見えなくなりますが、それでもつい、危険をおかしてそのまま進もうとするものです。そこで、冒は〝危険をおかす〟という意味に転じて、「冒険」という使い方が生まれました。そのため、帽子の意味を表わす字としては、冒に、材料の布を表わす部首の巾をつけて帽としたのです。

曼は、帽子を目深くかぶった人の手を取って〝手を引いてやる〟のが本義の字です。転じて、〝引っぱる〟ことから〝長く伸びる〟という意味に使われるようになりました。音は冒が変化してバン。普通は呉音のマンで読まれます。

蔓は、草と、長く伸びるという意味の曼とで、〝草の長く伸びるところ〟つまり〝つる〟を表わしたものです。「蔓延」は蔓が延びるという字義ですが、〝はびこる〟ということで、「病気が蔓延する」というようにも使われます。

鰻は、〝長く伸びた魚〟という意味の字ですから、言わずと知れた〝うなぎ〟です。

饅は、〝大きく引き伸ばされた食べ物〟という意味の字で、ふくらし粉を使って原形より大きくふくらませて作った「まんじゅう」（饅頭（ジュウ））のことを言います。頭のように〝まるい〟という意味で「饅頭（マントウ）」と言います。なまって、「まんじゅう」になりました。

幔は、〝長く引きめぐらされた布〟という意味の字で、〝長く引き渡す幕〟のことを言います。普通「幔幕（マク）」というように使います。

漫は、蔓延（ひろがる）という意味の曼に水のしるしを加えて、〝水が広々としている〟様子を表わした字です。「漫々」は、海の広々と果てもなく続く有様を表現したものです。〝果てもない〟という意味で、〝心の趣くままにする〟「漫遊」「漫歩」「漫筆」「漫談」などのことばが生まれました。「漫画」も、その意味のことばです。

慢は、〝心が果てもなく大きく広がる〟ことを表わした字です。「慢心」「驕慢」など、〝おごりたかぶる〟意味と、「放慢」「怠慢」など〝しまりがない〟意味とがあります。また、〝長びく〟意味に「慢性病」という使い方もあります。これはむしろ、「曼性」と書くべきものでしょう。「自慢」と同じ意味であるべき「我慢」が、遂に〝放慢をおさえる〟意味に使われているのはどういうわけでしょうか。仏語（ブッゴ）では「我慢」とは、〝自分を偉く思い、他人を軽蔑する〟という意味に使い、また、わが国でも古くは、「我慢」は〝わがまま〟の意味に使っていたのです。

非

非は、鳥で、鳥が両翼を開いた形を表わしたものです。翼が左右反対に向いているというので、〝反対〟または〝否定〟する意味を表わしたものです。音は〝背（そむ）く〟意味の背（ハイ）で

す。つまってヒとも読みます。また、〝いけない〟〝悪い〟という意味にも使われます。

扉は、〝左右反対に開く戸〟という意味の字で、〝観音開きの戸〟が本義の字です。片開きの戸なのに、「扉」の字を使っているのをよく見かけますが、それは、扉を単なる〝とびら〟の意味に誤解しているためです。音は非（ヒ）です。開扉、自動扉。

排は、〝反対〟の意味の非に手を加えて、〝反対側に押しのける〟という意味を表わしたものです。音は非（ハイ）です。「排斥」「排除」「排撃」などと使います。また、「排気」「排水」のように〝外に出す〟意味に使います。バレーボールを「排球」というのはうまい訳語ではありませんか。

誹は、〝非難して言う〟という意味の字です。〝そしる〟ことです。「誹謗（ヒボウ）」などと使います。この非は、〝悪い〟という意味の非です。

俳は、〝非人〟（人でない）という意味の字です。昔、乞食（こじき）（食べ物を乞い歩く人という意味のことば）のことを〝人でない〟という意味で〝非人〟と言いました。また、昔は舞台役者を軽蔑して〝川原乞食〟と言いました。つまり、「俳優」というのは〝非人〟という意味のことばだったのです。音は非（ハイ）です。「俳徊」というのは、乞食のように、〝うろつきまわる〟というのが本義ですが、今は〝そぞろ歩き〟というように、高尚な意味のことばに使われています。「徊」は、人が歩き回るという意味の字です。

俳は、わが国では「俳諧」に関係して、俳句、俳人、俳画などと使われています。

徘は、「俳徊」の意味のために、あとから作られた字です。つまり、亻の代りに、〝歩く〟意味の彳を使ったもので、今では「俳徊」は、「徘徊」と書かれることが多いようです。

霏は、俳が人であって人でないように、〝雨であって雨でない〟ものを表わしています。つまり〝きり（霧）〟や〝もや（靄）〟のことです。また、非は飛（ヒ）と同音なので、〝雨中

雪が風に吹かれて飛ぶ〟意味にも使われます。雨（雪）が霏々と降る。

匪は、箱（匚）であって、箱でない〝はこ〟という意味の字です。匚は、〝はこ〟の意味の部首です。〝はこがまえ〟と言います。普通、箱と言えば方形をしていますが、匪は、〝円形のはこ〟のことです。それで、箱でない箱という意味で非と匚とでこれを表わしたものでしょう。匪は、「匪賊」など、非の意味で使うことが多いので、はこの匪のために竹を付けて「篚」という字を作りました。

輩は、〝車が押しのけ合うようにぎっしりとならんでいること〟つまり〝多くの車〟というのが本義の字ですが、今は、全く車に関係なく、〝多くの人〟という意味で〝仲間〟の意味に使われています。音は非（ハイ）です。同輩、先輩、後輩。

斐は、模様の意味の文と非との会意形声字で、〝ぎっしりと並べられた模様〟という意味の字です。〝美しい〟〝あや〟（模様）という意味に使われ、人の名前にもよく用いられるものです。

悲は、心の中でこうありたいと願っていることと反対の結果になって悲しい、という意味で〝かなしい〟という気持を表わした字です。

悱は、悲と全く同じ部首で作られた字です。心に思っていることが、思うように言うことができないで〝いらだつ〟という気持を表わした字です。同じ「亡」（うしなう）と心とで、「忙」（いそがしい）と「忘」（わすれる）とを作ったのと全く同じ例で、同じ材料を使って作っても、味わいの違ったものができるものですね。悲も悱も、音は非（ヒ）です。

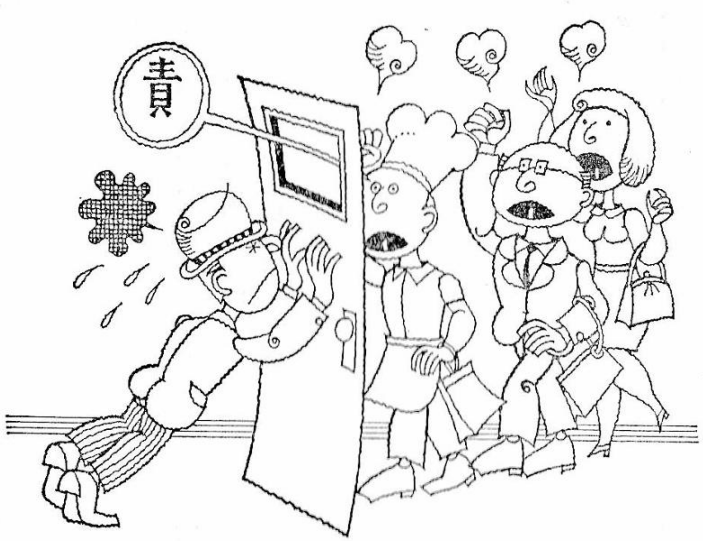
論語に「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず」とあります。憤は、思うことが心に溢れるほどあって、おさえ切れないことで、悱と同じく、うまく心の中が言い表わせないでいらだつことです。孔子は、弟子たちの学習状態がそういう状態にまで達しなければ教えなかったということです。これが「啓発」ということばの起りです。

菲は、かぶに似た「ヒ」と呼ぶ野菜のことです。非（ヒ）と草の形声字です。「菲食」は菜食の意味で、粗食であることを表わしたことばです。また、「浅学菲才」などと自分の才能を謙遜して言うのに使います。

緋は、色を表わす部首の糸と非（ヒ）との形声字で、ヒという色のことです。色には、工（コウ）という色の紅、甘（コン）という色の紺、彔（ロク）という色の緑、此（シ）という色の紫など、糸の形声字が多くあります。

責

責は、丰（セキ）と貝の会意形声字です。丰は束（セキ）の略字です。束は、木にとげの形を表わした「を加えて、〝とげのある木〟という意味を表わした部首で、これに刂（刀）を加えると「刺（セキ）」（さす）という字になります。束＝丰は、部首としては言うことを聞かないと刺すぞと言って〝せめる〟意味を表わします。



責は、〝貸した金（貝）を返せと言ってせめる〟というのが本義の字です。これは、〝人としては当然なすべきことを人に求める〟ことなので、〝義務〟という意味にも使われます。音は丰（セキ）です。責任、責務、職責。

積は、〝責任として納入すべき稲（禾）〟

という意味の字で、P32の「租税」の本字です。「租」の項で説明したように、税として納入すべき米はもみのままで積まれますので、「つむ」という意味を表わしたのです。「つむ」ことを表わした「租」が「税」という意味を表わし、「税」という意味を表わした「積」が「つむ」という意味を表わしているのは、興味あることではありませんか。音は責（セキ）。積載、積雪。また〝積んだかさ〟をも意味します。容積、体積。また、「消極」に対して「積極」という使い方もあります。

績は、責と糸との会意形声字で糸を〝つむぐ〟という意味を表わした字です。糸をつむぐ様は、実にせわしく責（せ）めはたっているようですので、「糸を責める」という字になりました。音は責（セキ）です。紡績。また、〝でき上った仕事〟〝できばえ〟の意味にも使われます。成績、功績。積と績とをよく混同する人があります。しかし部首の意味を土台に、しっかりと本義を理解すれば混同することはありません。

磧は、石が積み重なってころがっている〝かわら〟（川原）のことです。音は責（セキ）です。

漬は、〝水責め〟という字で、〝水につける〟という意味を表わしました。沈漬（沈んで水に漬かる）。今は、多く「みそ漬」「かす漬」などの使い方をしています。

艮

艮は、古い字形が、目と人との会意字です。「見（）」と反対の形ですので、後ろをふりかえって見ている形です。〝ふりかえる〟のが本義で、〝立ち止まる〟という意味に使われます。音は見（ケン）の変化したコンです。

限は、崖（阝）に〝立ち止まる〟という意味の艮とで、それ以上進まない。つまり、〝ここまでとかぎる〟ことを表わした字です。「極限」「制限」「限界」というように使います。

音は見(ケン)が濁ってゲンです。

根は、〝立ち止まる〟という意味の艮と木とで、木がしっかりと立っている〝もと〟である〝ね〟を表わしたものです。木は〝ね〟によってしっかりと立っていられるわけです。木の最も大切な部分というので、「根本」は、〝大切なもの〟ということを意味します。根気、根性。音は艮(コン)です。

眼は、根の意味の艮と目との会意形声字です。目は単に目という物体を表現した文字ですが、眼は、見るという働きを持った目の内部構造までを含めた意味の〝め〟です。だから、目に見えない部分を含むことを艮によって表わしたのです。「眼力」は、単に目でなく、見る働きとしての目の力という意味です。眼識、眼光、心眼。

恨は、心の中に根をはったように、いつまでも忘れられない深い〝うらみ〟のことです。よくいう「根(ね)に持つ」「根に思う」という〝うらみ〟方です。「憾」は、一時的な感情で、その場限りであとに引かない〝うらみ〟です。「怨」は、仕返しをしたく思う〝うらみ〟です。「懟」は、お互いに〝うらみ合っている〟うらみです。「慍」は、だれという特定の相手のない〝うらみ〟です。

痕は、疒と艮との会意形声字です。木は切ってもあとに根が残るように、病気がなおっても、あとに残る〝きず〟あとを「痕」と言うのです。今では、病気やきずに関係なく、〝あとに残ったもの〟を言います。「人の住んでいた痕跡(セキ)もない」「墨痕(ボク)鮮やか」。

跟は、〝足の根〟という意味で、くびす（きびす＝かかと）を表わした字です。音は艮(コン)です。〝人のかかとに続く〟という意味で、〝随行〟の意味にも使います。跟随(ズイ)、跟従(ジュウ)。

銀は、〝金に続く〟という意味で、金に続く価値を持つ金属を表わした字です。金はこがね（黄金）、銀はしろがね（白金）、銅はあかがね（赤金）、鉄はくろがね（黒金）と言います。

弋

弋は大で、土地の境界線をはっきりさせるためにたてた〝木の枝〟の象形です。〝目じるし〟〝標識〟（しるし）という意味を持った部首です。音はヨク。

杙は、〝目じるしの木〟という意味の字で、〝くい〟のことです。棒杙。音は弋（ヨク）。

代は、〝かわりだというしるしを持った人〟という意味で、弋と人との会意字です。代理人は、代理人であることを証拠立てるしるしを持たなければ、信用できません。しるしは、代理人にとって重要なものですから、弋と人とで〝かわり〟の意味を表わしました。音は〝かわる〟意味の替（タイ）です。更代（更替）。「代表」は大勢の人の代りという意味。「代金」は、品物の代りという意味。「世代」は子が親に代るという意味です。「現代」「古代」「時代」の代は世の意味です。

貸は、〝次の世代へおくる財貨（貝）〟という意味の会意形声字で、「遺産」が本義の字です。つまり〝ただでゆずるお金〟ですから〝一時的にただでゆずる〟という意味に使われるようになりました。今は、専ら〝かす〟という意味に使われています。貸借（貸し借り）、賃（チン）貸。音は代（タイ）です。

黛は、〝まゆ毛をそって、代りにえがく黒いまゆずみ〟のことです。黒は「墨」（すみ）の意味です。墨は、粘土をまぜて固めますので、黒と土の会意字です。

袋は、〝着物（衣）の代りに、体をつつむ布〟というのが本義の字です。昔は、今のように裁縫道具が発達していませんでしたので、普段着などは、布をただ体に巻きつけるだけですませていたのです。この布が、〝衣の代用品〟という意味で、「袋」と呼ばれたのです。転じて、〝物を包む布〟さらに〝物を包む紙〟まで、袋と言うようになりました。「手袋」「足袋」（たび）などは、袋の本義に近い用法なのです。

式は、弋とエとの会意字です。エは、Ｉで長さの単位を表わした指事字で、また、定規の象形字とも見られます。「工作」の意味の部首です。式は〝工作をする時の目じるし〟という意味で、〝ひな型〟〝手本〟という意味を表わしたものです。「方式」「格式」は〝手本〟の意味を持つことばです。今では、一定の型によって行なわれるものすべてに使われています。入学式、礼式、公式、形式。音はシキです。

試は、〝式に従って言ってみる〟という意味の字です。〝ためしてみる〟〝こころみる〟ということです。試験。音は式（シキ）が短く発音されてシです。

尚

尚は、尚で、八（分ける、開く）と向（ショウ）との会意形声字です。向は、家の窓の象形で、尚は、〝窓をあけはなつ〟ことを表わした字です。〝日光や新鮮な空気が家にはいることを願う〟という意味で、〝希望する〟のが本義の字です。また音が上（ショウ）と同じなので、〝うえ〟という意味、また転じて、〝尊ぶ〟意味にも使われます。尚武、尚古（古い物をたっとぶ）。

賞は、上の意味の尚と貝とで、〝ほうびとして上の人からたまわる財貨〟という意味を表わした会意形声字です。今の〝賞与〟〝賞金〟にあたる字です。転じて〝ほめる〟という意味に使われます。音は尚（ショウ）です。賞賛、賞嘆、鑑賞。

償は、〝賞はその人の労苦に対する代価であり、つぐないである〟という意味で、賞と人とで、代価〝つぐない〟の意味を表わした字です。代償、弁償、償却。

裳は、上（ショウ）の意味の尚と衣との会意形声字です。衣は今のブラウスで、それを着て、その上にはくのがスカートです。〝上にはく〟という意味で、スカートを表わしたのが裳で

す。衣と裳とで一組になりますので、衣類のことを「衣裳」と言うのです。古くわが国では、裳を〝も〟と呼びましたが、衣と裳と続いているワンピースの場合は〝ずそ〟の意味に使いました。音は尚（ショウ）。

常は、布の意味の巾と尚との会意形声字で本義は、「裳」と同じ、スカートのことです。元来、スカートは、布を腰に巻きつけるだけで、簡単な衣類ですから、昔は婦人の普段着として〝つねに〟用いられたものです。それで、〝つね日ごろ〟の〝つね〟の意味が生まれ、裳と常と用法が違ってきたのです。〝いつも〟常時、常勝、常用、〝普通〟常識、平常。音は尚（ショウ）が濁ってジョウになりました。

掌は、手の上に物をのせる時に使う〝手のひら〟〝たなごころ〟のことです。手と、上の意味の尚（ショウ）とで表わした会意形声字です。「掌握」は、〝手のうちにある〟→〝自分の物とする〟意味に使われます。〝手を使う〟ことから転じて〝仕事をする〟意味にも使います。分掌（分かれて仕事する）、職掌、車掌（車の仕事）。

堂は、上の意味の尚と土との会意形声字です。土を高く盛って、その上に建てた〝りっぱな建物〟という意味を表わした字です。尚の向は元来、建物の象形ですから、その方からも、盛り土の上の建物の意味に取れます。寺院の本堂、講堂、殿堂、公会堂。また、〝りっぱな〟意味で「威風堂々」などとも使います。音は尚（ショウ）がなまってドウ。

瞠は、りっぱな建物に驚いて、〝目を見はる〟という意味の字です。瞠目、瞠若。音は堂（ドウ）です。

党は、人の意味の儿と尚との、会意形声字です。この字の本字は儻です。古書に、「五家を比、五比を閭、五閭を族、五族を党という」とありますので、かなり大きな聚落の称です。今は単に〝人の集まり〟〝仲間〟という意味に使われています。政党、徒党。

肖

肖は、肉体の意味の月と小（ショウ）との会意形声字です。親と子とは、肉体の大きさが違うだけで、顔形から話し方、癖までよく似ているものです。子は〝肉体が小さい〟だけで、あとは〝似ている〟という意味で、〝似る〟という意味を表わした字です。特に、子が親に似るという場合の〝にる〟に用います。だから「不肖」というのは、〝親に似ない愚かな者〟という意味の字です。肖像。音は小（ショウ）です。

部首としては、ほとんど〝小さい〟の意味に使われます。

霄は、〝似る〟意味の肖と雨との会意形声字です。〝雨に似たもの〟雨まじりの雪、つまり、〝みぞれ〟のことです。音は肖（ショウ）です。

鞘は、〝似る〟意味の肖と革（なめし皮）との会意形声字です。〝刀のさや〟のことですが、刀身をぴったりとおさめるために、刀身によく似せて作るので肖と言うのです。古くはなめし皮で作りました。音は肖（ショウ）です。

消は、〝小さい〟意味の肖と水との会意形声字です。〝水が少なくなる〟という意味の字です。転じて、すべて物の減少する意味に使われ、今では〝きえる〟意味に多く使われます。消滅、消却、消化。「消息」は、元来、消えることと生ずることの意味ですが、生滅、増減は物の変化することですから〝変化〟→〝様子〟の意味に使われます。「友人の消息を気づかう」。

硝は、〝水につけるととけて消える石〟という意味で名付けられた「硝石」のことです。初め、「消石」でしたが、これを一字につづめて「硝」としたものです。音は肖（ショウ）です。

梢は、〝木の小さい部分〟という意味で、〝木の先端〟〝こずえ〟（木末（こずえ））を表わした字です。「本質的」でないことを「末梢的」と言います。音は肖（ショウ）です。

逍は、〝小道を歩く〟という意味の字です。「逍遥」という熟語で使われますが、遥は、ここでは、遠方まで行くという意味ではなく、近い範囲を行ったり来たりして長い距離を歩くという意味を表わしています。

宵は、〝家の中の人が皆似て見える〟という意味の字で、〝暗くなった〟ことを表わしています。訓は〝よい〟です。「夜」や「夕」が自然現象としての〝よる〟を表わしているのに対して、宵は、人間生活の感情が込められた〝よる〟のようです。熟語も「宵寝」「徹宵」など、そういうものに限られています。

韋

韋の凵は、凵で、止の反対の形です。（第二章 足 参照）。止は、止で、足の裏の象形です。凵を下向きにしたのが冂です。つまり、凵と冂とは足の向きが反対で、韋は、〝すれちがう〟が本義の字で違の本字です。部首としては〝ちがう〟〝反対〟という意味に使われます。音は韋（イ）です。

違は、〝道を行く〟という意味の辶と韋との会意形声字で、〝行きちがう〟〝すれちがう〟が本義の字です。今では、単に〝ちがう〟という意味に使われています。違反、違約、違算、違例。音は韋（イ）です。

偉は、〝ちがう〟という意味の韋と人とで、普通の人とはちがった人、つまり、〝えらい〟人という意味を表わした会意形声字です。偉人、偉大、偉業。音は韋（イ）。

緯は、〝行ったり来たりする〟意味の韋と糸との会意形声字で、はた（織機）を織る時〝行ったり来たりする糸〟つまり〝横糸〟のことです。たてに張られた「経」に対して「緯」が行ったり来たりして織られ、布になります。地球上の位置を示すのに、南北に両極を貫

く線を引き、イギリスのグリニッチ天文台を通過する線を〇度とし、三六〇度に分かって、これを経度と呼びます。この経度を示す線が「経線」です。この経線に直交する線が「緯線」で、赤道を〇度とし、両極まで九〇度に分かって、これを緯度と呼びます。地球上の位置は、この「経緯度」によってはっきりと示されるわけです。「経緯」は、〝縦糸と横糸〟という意味ですが、〝事の次第〟〝いきさつ〟という意味に使われます。

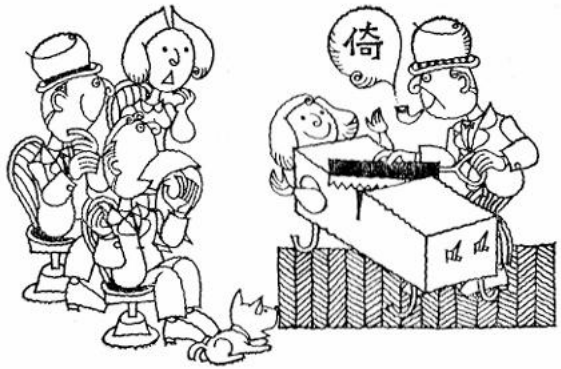
衛は、行と韋との会意形声字です。行の古い形は𢓊で、道の象形です。道の象形により、〝歩行〟の意味を表わした指事字です。従って、衛は、〝道を行ったり来たりする〟のが本義の字で、つまり、英語のパト ロールに当たります。これは、「警戒」することを意味していますので、〝まもる〟の訓があるのです。「警衛」は行ったり来たりして警戒することです。その任に当たる兵隊が「衛兵」です。音は、韋(イ)が強く発音されてエイとなりました。

葦は、〝韋(イ)〟と呼ばれる草で、韋と艹との単なる形声字です。和名は〝あし〟ですが、これは〝悪(あ)し〟に通ずるので〝よし(善し)〟とも呼ばれます。「葦(よし)のずいから天井のぞく」(いろはガルタ)。

奇

奇は、大と可(カ)との会意形声字です。〝大いによろしい〟ということで、〝珍しい〟という意味を表わしています。珍しいことは二つとはないので、〝一つ〟の意味にもなります。また、珍しいことは、〝不思議〟なことでもあり、変だなあと〝あやしむ〟ことにもなります。音は可(カ)の変化したキ。

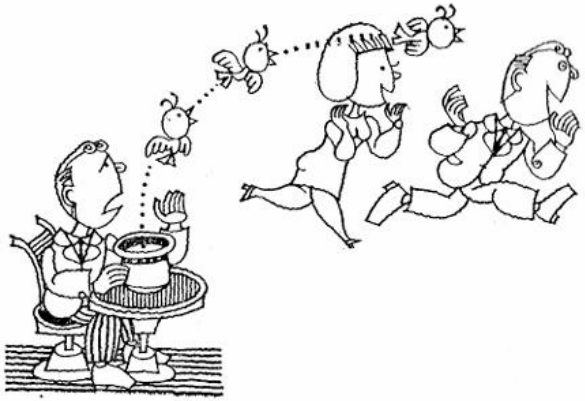
珍しい……「珍奇」「奇計」



一つ……「奇数」
不思議……「奇術」「奇跡」
あやしむ……「奇怪」

崎は、〝珍しい山〟という意味の会意形声字です。音は奇（キ）です。普通の平地にある山形の山ではなく、海の中に突き出たゴツゴツした岩の多い珍しい形の山で、〝みさき〟のこと。〝崎〟の漢字は単独では使われず、「山崎」とか「長崎」とか使われるので、「さき」と読まれます。先（さき）の意味のことばです。

埼は、崎と同じ成立ちで〝珍しい土地〟つまり、変化に富んだ地形の土地の意味です。訓は崎と同じ



「さき」です。

綺は、〝珍しい糸〟という意味の会意形声字で、音は奇（キ）です。〝あや模様のある絹糸〟のことを言います。「綺羅星の如く……」などと使われますが、羅は薄くすきとおった絹のことです。どちらも昔は貴重な物でした。「綺麗」は、綺のように美しいという意味の字です。わが国では、「きれいにすっかり忘れてしまった」などとも使います。

倚は、人は珍しい物に〝よりつく〟という意味で人と奇とで〝よりつく〟意味を表わしたものです。音は、奇（キ）。また、子音が取れてイとも発音し

ます。この場合は、〝依〟と同音同義になります。倚託（依託）、倚賴（依頼）。

椅は、倚の意味の奇と木との会意形声字です。〝倚（よ）りかかるための木製の道具〟という意味の字です。「椅子」という言葉のために作られた字です。音は倚（イ）です。

寄は、〝家に身を倚（よ）せる〟という意味で、家の意味の宀と、倚の意味の奇との会意形声字です。音は倚（キ）です。

寄宿、寄港（船が港による）。寄稿。また、〝与える〟意味にも使われます。寄贈、寄付、寄与。

亢

亢は亢で、手を広げ足を大きくふんばり、通せんぼをしている形を象ったもの。抗の本字で〝ふせぐ〟〝こばむ〟〝さからう〟が本義の字です。転じて〝たかぶる〟の意になりました。亢奮、亢進（たかまり進む）。音は高（コウ）です。

抗は、〝こばむ〟という意味の亢と手との会意形声字で、音は亢（コウ）です。〝手をあげてふせぎこばむ〟という意味です。抵抗、反抗、抗議、抗戦。

忼は、〝たかぶる〟意味の亢と心との会意形声字で、〝心がたかぶる〟という意味の字です。悲憤忼慨。

航は、〝抵抗〟の意味の亢と舟との会意形声字で〝川の流れにさからって舟を進める〟という意味の字。〝舟を目的地に向けて進める〟のが本義ですが、今では飛行機の場合にも使います。「航海」→「航空」。「航路」→「航空路」。

坑は、「亢進」や「航行」の意味の亢と土との会意形声字です。土地にあなを掘り進めることは大変に抵抗の多い仕事ですが、その困難にさからって掘り進めた〝あな〟が「坑」

です。〝地中に掘りあけた深いあな〟のことを言います。今では石炭や鉱石を採掘するための〝あな〟を言います。炭坑、金坑、坑内、坑道。

杭は、高（コウ）の意味の亢と木との会意形声字で、〝高く突き出た木〟つまり、〝棒くい〟のことです。

喿

喿は、品と木との会意字です。〝木の上にたくさんの鳥がいて、口をそろえてさえずっている〟ことを表わした字で、〝噪（さわがしい）〟の本字です。音は騒（そう）の意味でソウです。

噪は、口と喿（ソウ）との会意形声字で、音は喿（ソウ）です。〝さわぐ〟〝さわがしい〟という意味の字です。喧噪（ケン●）（やかましい）、蛙鳴蟬噪（アメイゼン●）（蛙も蟬も共に鳴き声がうるさいものです。役にも立たぬだけでうるさい文章や言論を軽蔑して言う時に使うことばです）。

譟は、言と喿との会意形声字で、音は喿（ソウ）です。〝大勢の人が集まってがやがやさわぐ〟ことを言います。狂譟（キョウ●）（狂ったようにさわぐ）。

躁は、足と喿との会意形声字です。〝わいわい言いながらさわがしく歩き回る〟ことを表わした字です。若い人たちの間にはやりのモンキーダンスなどは正にこの躁に当たります。狂躁（狂ったように騒ぎおどり回る）。

澡は、水と喿との会意形声字です。躁が若者のダンスなら、澡は奥様の井戸端会議です。昔は川端で奥様たちがペチャペチャ世間話をしながら洗濯をしたものですが、その様を〝澡〟と言ったのです。〝あらう〟が本義です。澡洗。「澡室」は風呂場のことです。

藻は、喿と水と草の会意形声字です。〝絶えず水の中でゆらゆらと動いている草〟とい

う意味がすぐ推察できるでしょう。〝水草〟である〝も〟のことです。海藻。転じて、〝詩文の美しい表現〟→〝美しい文章や詩〟のことを言います。文藻、詞藻。

繰は、糸と喿との会意形声字で、音は喿（ソウ）です。糸を繭からとる時は、糸車がからがらと勢いよく音を立てて回るのでやかましいものです。そこで〝糸をとる〟ことを、繰で表わしたものです。このことを〝糸をくる〟と言うのは、糸を合わせるため、次から次へと新しい繭の糸口を拾って〝くりこむ〟ためです。訓は「くる」と読みます。「繰越（くりこし）金」「繰上げ」など、多くは訓読みとして使われます。

操は、手と喿との会意形声字で、〝手をせわしく動かす〟という意味の字です。それは〝手を巧みに使う〟ということですから、〝あやつる〟ことになります。操作、体操。また、手仕事の意味から、〝おこない〟の意味で「操行」などの使い方が生まれ、また「節操」「貞操」などの使い方が生まれました。

懆は、心と喿との会意形声字です。意味は言わなくてもお分かりでしょう。〝心がそわそわして落ち着きのない〟ことです。

令

令は、亼（シュウ）と卩との会意字です。亼は、集の本字で〝ひと所に集まる〟という意味を表わした指事字です。卩は〝しるし〟という意味の部首です。天子が諸侯を召集して、授ける〝書きつけ〟が令です。〝天子の授ける辞令〟が本義です。音はレイです。転じて、〝役所から出る書きつけ〟の意味になりました。令状、政令、法令。また〝りっぱ〟〝よい〟という意味に使われます。令名、令色。また敬称に使われます。令嬢、令夫人。

命は、口と令との会意形声字。〝口で直接に伝える令〟という意味です。音は令（レイ）の変化

したメイです。今では、命も令も、文書、口答に関係なく使われます。命令。〝いのち〟（生命）という意味は、それが天の命令（天命）であって人力ではどうすることもできないものである、という考え方によるものです。つまり、早死にするのも天命、長生きできるのも天命、〝いのち〟は天命である、というので、命が〝いのち〟になったのです。

冷は、冫（凍の本字、こおり）と令との会意形声字で、音は令（レイ）です。君主の命令は〝つめたく厳しい〟ので、冫（こおり）の冷たいのと合わせて〝つめたい〟という意味を表わしました。

・冷凍、寒冷、冷蔵庫。

零は、冷たい意味の令と雨とで〝冷たく感ずる雨〟という意味を表わした会意形声字です。ぽたりと落ちる〝しずく〟はえり首などに当たると、ひやっと感じます。〝しずく〟が本義で、それは小さい水滴ですから、〝細かい〟〝小さい〟という意味にも使われます。

・零細企業、零点。また〝雨がふる〟こと。

鈴は、〝よい〟という意味の令と金との会意形声字で、よい音を立てる金属製の〝すず〟を表わした字です。音は令（レイ）ですが、令の中国音はリンで、鈴の音色を表わしています。

風鈴（フウリン）、銀鈴（ギンレイ）、呼び鈴（リン）。

玲は、〝よい〟という意味の令と玉との会意形声字で、〝玉が美しい音をたてる〟という意味と、〝玉が美しい〟という意味とあります。音は令（レイ）です。「玲玲」は中国音では「リンリン」で、玉の触れあって生ずる美しい音色を表わしたものです。「玲瓏（ロウ）」は宝玉の美しいことを表わしたことばです。

怜は、〝心がよく働く〟という意味の心と令との会意形声字です。音は令（レイ）。〝賢い〟〝さとい〟ということです。怜悧（リ）。

齢は、〝年〟の意味を表わす歯と令との会意形声字です。音は令（レイ）。令は、命と同じ意味ですから、〝いのち〟つまり〝年（とし）〟の意味をもっています。歯は「年歯（ネンシ）」（わが国では。と

しはも行かぬなどと訓読みします）という熟語が示すように〝とし〟の意味に使われています。年齢、老齢、妙齢、適齢。

寮

寮は、古い形が[illegible]で、木と火と日の会意字です。〝焚（た）き火を焚いて、昼間のように明るくする〟という意味の字です。「燎」の本字です。音はリョウ。

燎は、火と寮との会意形声字です。〝火を赤々と燃やす〟という意味の字です。「燎原の火」とは、野原を焼く火が見る見る広がって〝勢いのすさまじい〟ことですが、それを物事のたちまちに広まること、勢いの強いことのたとえに使われます。

寮は、宀と寮との会意形声字で、音は寮（リョウ）です。〝建物（宀）の中で、昼間のように火を焚く〟ことで、〝役所〟を表わしています。昔は、電燈がありませんでしたので、役所では夜、焚き火を焚いて仕事をしました。わが国でも、昔は役所の名前に「〇〇寮」という名が付けられていましたが、今では、学生の宿舎のことに使われています。学生寮、寮歌。

僚は、役所の意味の寮と人との会意形声字で〝役所の人〟という意味の字です。今でも「官僚」などの用法があります。「同僚」は、同じ役所の仲間という意味の字です。

瞭は、〝明るい〟という意味の寮と目との会意形声字で、〝目がはっきりとよく見える〟〝物事がよくわかる〟という意味の字です。明瞭（メイ）。一目瞭然（イチモク・ゼン）（ちょっと見ただけではっきりとわかる）。

療は、〝明るい〟意味の寮と疒との会意形声字です。病気の原因を明瞭にして、その原因を取り除くことで、〝病気をなおす〟という意味を表わしています。治療、療養。

化

化は、人とヒとの会意形声字です。ヒには二つの形があります。一つは匕（ヒ）であり、一つは匕（カ）です。化のヒは匕で、人の倒れた形を表わしたもので、〝死ぬ〟意味の部首です。だから、化は、〝人が死ぬ〟という意味の字です。死は大変化ですから、〝かわる〟意味に使われ、死んで〝ばける〟という意味にも使われます。

化合、消化等。化は変より大きい〝かわり方〟であることに注意して下さい。音はヒです。

花は、変化の意味の化と草との会意形声字です。言わば〝草のお化け〟です。音は化（カ）。

靴は、革（なめし皮）と化との会意形声字です。〝革が化けて〟くつになったというわけです。音は化（カ）です。

訛は、〝人を化かす言葉〟という意味の会意形声字で、〝人をだます〟のが本義です。今は〝正しくない言葉〟ということから〝なまり〟という意味に多く使われています。音は化（カ）です。

囮は、囲んで捉える意味の囗と化との会意形声字です。〝だまして捉える〟のに使う〝おとり〟のことです。生きている鳥を使って野鳥を油断させ、だまして捉えますが、その時に使う鳥を〝おとり〟と言うのです。音は化（カ）です。

貨は、お金を意味する貝と化との会意形声字です。〝お金に化けるもの〟という意味で〝値うちのある品物〟というのが本義です。財貨、貨物。転じて〝お金そのもの〟の意味にも使われます。金貨、硬貨、貨幣。音は化（カ）です。

商

商は、啻の変形で、〝ただ一つ〟という意味の字です。帝（皇帝）はただ一人しかいないからです。部首としては、同音の的（まと）の意味にも使われます。音は帝（テイ）がつまってテキになりました。

滴は、〝ただ一つの水〟という意味の字で〝しずく〟のことです。音の商（テキ）は、水滴のしたたる音をも表わしています。

嫡は、〝ただ一人の女〟という意味の字で〝本妻〟のことを言います。「嫡子」は、家を継ぐべき〝ただ一人の子〟つまり正妻の長子のことです。「嫡流（チャクリュウ）」は〝本家すじ〟という意味です。音は商（テキ）、またはなまってチャク。

摘は、的の意味の商と扌との会意形声字です。目標とするものを手に入れるという意味の字で、取ろうとねらったものを正しくつまみとることです。摘出、摘発（隠された悪い事を見つけ出す）、摘要（多くの事がらの中から重要な点を抜き出すこと）。音は商（テキ）。

適は、的の意味の商と辶との会意形声字で目標に向かって進むという意味の字です。〝行く〟という意味と、〝目的地に行き着く〟という意味とあります。目的を果たすことから転じて、〝うまくいく〟という意味になります。適中（的中）、適当、適材適所、適者生存。音は商（テキ）。

敵は、的の意味の商と攵との会意形声字です。目標とする相手に向かって武器を取るという意味の字で〝目指す相手〟〝戦いの相手〟を表わした字です。自分と対等に戦える〝良い相手〟の意味に使います。好敵手、天下無敵、衆寡敵せず。音は商（テキ）です。

翟

翟は、隹（鳥）と羽との会意字で、〝羽の美しい鳥〟が本義の字です。きじ（雉）の名に用いられるのは、きじの尾が長くて、羽の模様が美しいからです。部首としては、〝きらきらと美しく輝く〟〝羽をぱたぱたさせる〟という意味に用いられています。音はタク、またはテキ。羽ばたきの音を表わしたものです。

濯は、水洗いして、衣類を美しくすることを表わしたシと翟の会意形声字です。音は翟（タク）です。洗濯。

擢は、きじの羽の中から、とりわけ美しい羽を選び抜き取るという意味の字で、手と翟との会意形声字です。音は翟（テキ）。〝ぬきだす〟抜擢。

躍は、羽をぱたぱたさせる意味の翟と、足との会意形声字です。鳥の飛び立つように、〝足をおどらせる〟ことです。〝とびあがる〟音は翟（タク）が変化してヤクになりました。跳躍、飛躍、勇躍、躍進、躍動。

趯は、躍と同じ意味の字です。〝おどる〟こと。音は翟（テキ）。

曜は、美しい意味の翟と日との会意形声字で〝日の光がきらきらと美しく輝く〟という意味の字です。〝かがやく〟日の光の意味に使われます。今では、日曜、月曜などというように使われますが、この曜は、〝空に輝く天体〟という意味で、太陽、月、火星、水星・・・・土星を指しています。音は翟（ヤク）（躍）が変化してヨウ。

耀は、火が赤々と燃えることで、〝火がかがやく〟という意味です。音は翟（ヨウ）（曜）。栄耀栄華。

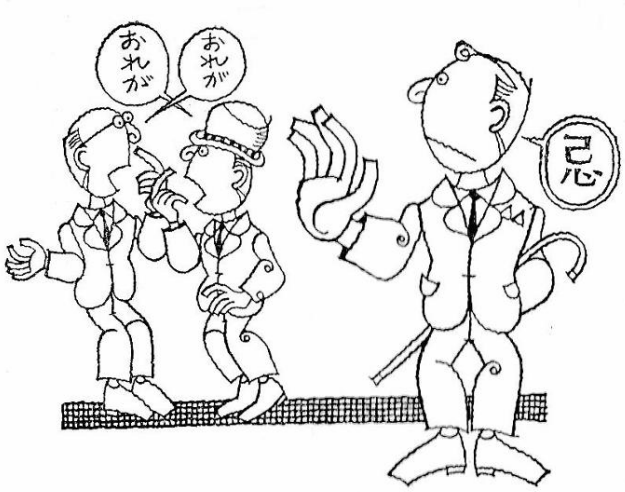
耀は、きらきらと〝光り輝く〟という意味の字です。音は翟（ヨウ）。

己

己は、〇で、曲がりくねった糸の象形です。糸の先端を表わしているところから、〝はじめ〟という意味を表わした指事字で、「紀」の本字です。今は、「自己」というように使われていますが、これは仮借です。音はキ、またはコ。

紀は、己が〝おのれ〟の意味に使われるようにたったため、〝糸の先端〟を表わす字として、己に糸を加えて作られた会意形声字です。音は己（キ）です。〝はじめ〟が本義ですが、記（しるす）の意味にも使われます。紀元、紀行。

記は、糸すじの意味の己と言との会意形声字です。〝言葉を糸のように長く続ける〟という意味の字で、言葉を整理し、順序立てて〝書きしるす〟ことです。記録、記憶。記念は〝心にしるす〟意味のことばです。



忌は、〝おのれ〟の意味の己と心との会意形声字です。〝おれがおれがという心はいむべきである〟という意味の字で、〝いむ〟ことを表わしました。

〝心からきらう〟〝避ける〟という意味に使います。忌避（ひ）、嫌忌（けん）。

起は、はじめの意味の己と走との会意形声字です。〝走ることのはじめ〟は〝立ち上がること〟であるという考えで、〝立つ〟または〝おきる〟という意味を表わしたものです。音は己（キ）です。起立、起床。

また、已の本義の〝始める〟という意味にも使います。起工、起算、起原。

辟

辟は、尸辛（ヘキ）と口との形声字。口は丸い玉の象形で、璧の本字。辟は〝丸い玉〟が本義です。また、尸辛の意味にも使われます。辛は、亍で、受刑者に施す黥（いれずみ）をするのに使う針の象形です。転じて〝つらい〟意味に使われる字です。辛苦。尸辛は、人（尸）に黥を施すという意味の字で、〝罰する〟ことを表わした会意字です。

璧は、丸い玉のことです。辟が〝罰〟の意味に使われるために、玉を加えてこの字を作ったものです。双璧（ソウヘキ）（二人のすぐれた人物のたとえ）、完璧（カンペキ）（完全無欠）。

避は、罰の意味の辟と辶との会意形声字です。罰からはだれも遠ざかりたいというのが人情なので、〝さける〟という意味になります。音は辟（ヘキ）が変化したヒです。避難、避暑、逃避。

僻は、〝罰を受けた人〟という意味の辟と人との会意形声字です。こういう人は、とかくひがんだり、片寄った見方をしますので、〝ひがむ〟〝かたよる〟という意味を表わしました。音は辟（ヘキ）です。僻見、僻地。

壁は、避の意味の辟と土との会意形声字です。風や寒さを避けるために設けた土の障壁、つまり〝かべ〟のことです。音は辟（ヘキ）。壁画、城壁、絶壁。

癖は、僻の意味の辟と疒との会意形声字です。〝片寄った病気〟という意味で、好みなどの片寄りを言うようになりました。〝くせ〟。酒癖（シュヘキ）、盗癖（トウヘキ）、潔癖（ケッペキ）。

譬は、避（ヒ）の意味の辟と言との会意形声字です。物事を直接に言うことを避けて、類似の例によって説明すること。〝たとえ〟〝譬喩（ヒユ）（引き比べて言うので、比喩とも書く）。

臂は、辟と肉との形声字で、〝ひじ〟のことです。婦人がいやな男を避けるために〝臂鉄砲〟を使うのは、漢字の構造から見ても誠によく適っています。

闢は、門の両扉が互に避け合うように〝ひらく〟ことを表わした字で、辟と門との会意形声字です。門の扉を左右に〝おし開く〟のが本義です。天地開闢（カイビャク）（宇宙の初め）などと使われます。音は辟（ヘキ）、呉音はヒャク。

劈は、〝刀で切り開く〟という意味の会意形声字です。つんざくこと。闢と同じように、〝はじめ〟の意味にも使われます。劈頭（ヘキトウ）（一番初め）。

霹は、雷鳴の〝つんざく〟ような音を言います。雷の意味の雨と、闢の意味の辟との会意形声字です。「青天の霹靂」（青空の雷鳴は突然の変事を譬えたもの）というように使われます。

周

周は、用と口との会意字です。用は、甬で、牧場に張りめぐらした柵の象形で、〝はりめぐらす〟のが本義の字だということは、第一章の「甬」の所でお話しました。周は、〝口をめぐらす〟ということで、〝言葉を十分に尽して説明する〟のが本義の字です。転じて、広く〝物事のゆきとどく〟意味に使われます。用意周到。また、単に用の本義〝めぐる〟の意味にも使われます。周期、周囲、周遊、円周。音はシュウ。

週は、周と辶との会意形声字で、〝まわりをまわる〟のが本義の字です。今では、もっぱら七曜の一まわりする意味に使われています。週間、週刊誌、毎週。

稠は、ゆきとどく意味の周と禾との会意形声字で、〝稲の豊かにみのる〟ことを表わした字です。音は周（シュウ）がなまってチュウ。転じて広く〝物事の多い〟意味に使われます。人

口稠密。

調は、ゆきとどく意味の周と言との会意形声字です。音は周（チュウ）が変化してチョウ。言葉がよくゆき届いて、そのため物事が〝よくととのう〟という意味の字です。調和、調節。

彫は、〝かざり〟〝美しい〟という意味の部首の彡と周との会意形声字です。音は調（チョウ）。玉を削り磨いてよく調えることを「琱」と言います。仕上がってこれに〝かざり〟をつけるのが彫です。今は「彫刻」など、〝ほる〟〝きざむ〟という意味に使われます。

凋は、あまねく行きわたる意味の周と氷の意味の冫との会意形声字です。音は周（チュウ）。寒さがあまねくいきわたり、どこも氷でとざされる頃になると、草木は〝しぼみ〟ます。凋落（草木の葉がしぼみ落ちること、転じて人の落ちぶれること）。

蜩は、鳴き声のよくいきわたる〝せみ〟のことです。

白

白は、（㊀）。親指の象形で、〝親指〟が本義の字。〝しろい〟は仮借とされています。しかし、太陽の象形による指事字とも見ることができます。太陽光線は〝しろ〟ですので、親指の白とは別に作られたことも考えられます。白日、白光。音はハク。

百は、一と白との会意形声字。昔は、〝親指一本〟で〝ひゃく〟の数を表わしたことによります。「百」は〝一白（イッピャク）〟（一百）という字です。音は白（ハク）がなまってヒャク。

伯は、親指の意味の白と人との会意形声字で、〝大人〟という意味の字。兄弟の順序を「伯・仲・叔・季」で表わしますが、伯は一番年上の兄の称です。「伯仲」は、長兄と次兄の意味で、両者の差が少ないところから、優劣のつけがたい意味に使われています。

舶は、〝大船〟という意味の会意形声字です。音は白（ハク）。海洋を航行する汽船のことです。

「舶来」は、外国から汽船で運んで来るという意味の言葉です。

帛は、〝白い布〟という意味の会意形声字ですが、〝白い厚手の絹〟で、礼物として贈答用に用いられたものです。幣帛。昔、紙のない時代、竹簡と共にこの帛が紙の代りに用いられましたので、記録文書を「竹帛」と言いました。「功名を竹帛に垂る」とは、名を歴史に留めるという意味です。

粕は、酒を醸造して、清酒をとったあとに残る〝白い米〟つまり〝酒かす〟のことです。白と米との会意形声字です。

泊は、海水が〝白く見える所〟という意味の字で、海の浅い所を表わした字です。「碇泊」は、浅い所で碇を下して〝とまる〟こと。転じて、〝宿にとまる〟意味にも使われるようになりました。宿泊。

拍は、パンという音を表わす白と扌との形声字で、〝手を打つ〟という意味を表わしています。拍手。

半

半は、半で、〝物〟という意味の牛と八（分かつという意味の部首）との会意形声字です。〝物（牛と勿との形声字）を真二つに分ける〟という意味で、〝半分〟のことです。

判は、〝刂で切って半分にする〟という意味の会意形声字です。音は半。昔、証書の類は、二つに切って、その一つをそれぞれが保管し、二つがぴたりと合うのを証拠としました。〝真偽を判別する〟という意味の〝わかつ〟ことです。裁判、批判。転じて〝わり印〟の意味から〝印章〟のことを判と呼ぶようになりました。

伴は、英語の〝ベターハーフ〟の〝ハーフ〟に当たります。〝二人一組の半分〟という

意味で、半と人とでできた形声字です。〝つれ〟〝とも〟と読みます。同伴、随伴、伴奏。

袢は、〝上半分だけの衣〟という意味の字で、上半身に着るシャツまたはブラウスのことです。半と衣との会意形声字です。汗を吸って漏れる意味の襦と合わせると、「襦袢」になります。

畔は、〝田を分ける〟境界の〝あぜ〟が本義です。田と半との会意形声字です。転じて〝さかい〟の意味に用いられます。「湖畔」は、湖と陸地とのさかいの意味で、〝ほとり〟です。

拌は、異なった物を手で半分に分かち、それぞれ半分になったものを〝まぜ合わせる〟という意味です。交（混じる）の意味の攪と合わせた「攪拌」という言葉があります。普通「かくはん」と読まれています。

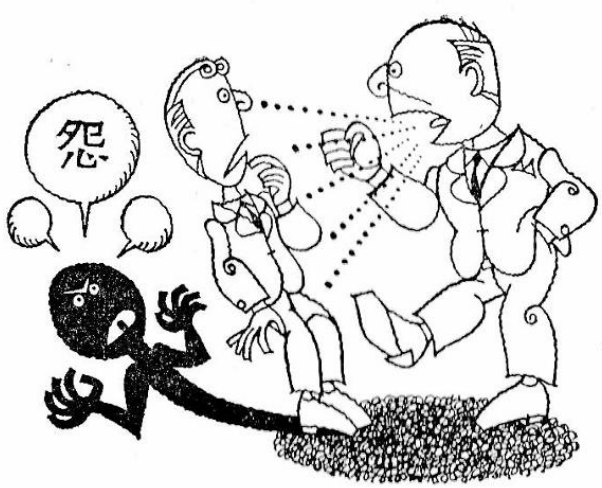
宛

宛は、人が膝を曲げた形を表わす[ㄴ]と肉と家の会意形声字です。〝人が膝を曲げてやっと食べていられるだけの家〟という意味の字で、〝小さな家〟が本義です。〝自宅〟の意味に使います。転じて〝あて〟という使い方を生じました。部首としては、〝[ㄴ]〟の〝屈曲〟の意味に多く使われます。

蜿は、屈曲の意味の宛と虫との会意形声字で、〝蛇のように屈曲する〟という意味の字です。蜒蛇、蜒々長蛇の列。

豌は、屈曲した蔓になる豆、つまり、豌豆です。宛と豆との会意形声字。

婉は、婦人のしなやかに屈曲する様を表わした字です。「婉然」は婦人のしなやかで美しい様子。「婉曲」は、直接に物事を言わずに遠まわしに言う意味の言葉です。



怨は、人の仕打ちに対して、腹を立てながらも、直接に怒りを表わすことができないで、遠まわしに〝うらみごと〟を言って、心にわだかまりを持つことです。宛の意味の 夗（エン） と心との会意形声字です。怨恨。

鴛は、婉然たる鳥という意味で〝おしどり〟を言います。おしどりは常に仲良くつがいで泳いでいますので、〝仲の良い夫婦〟のたとえに用いられます。「鴛鴦」。鴛は雄、鴦は雌を指しています。

苑は、草花の美しく咲き乱れたところという意味の、草と 夗（エン） との会意 形声字です。〝はなぞの〟です。動物を飼う〝その〟は、囲いが有るので囿（ゆう）と言います。苑囿。「園」は、苑と囿とを兼ねた意味の字です。

毎

毎は、母で、屮（屮＝艹）と母との会意形声字です。母なる大地の恵みを受けて〝草が生いしげる〟という意味の字です。転じて物事の〝重なる〟または〝重ねる〟意味に使われます。音は母（ボ）が変化してバイ。呉音はマイです。「毎日」は、〝日を重ねる〟という意味の言葉です。

梅は、毎と木の形声字で、〝ばい〟という名の木のことです。わが国の〝うめ〟のこと

ですが、この〝うめ〟は、梅の呉音〝マイ〟をそのように受け取ったものです。「ン」を「ウン」と発音するように、mei が ume となったものです。

誨は、〝重ねる〟意味の毎と言との会意形声字で、音は毎が変化してカイ。言葉を重ねて、〝ねんごろに教える〟という意味の字です。教誨、誨告。

晦は、草の茂る意味の毎と日との会意形声字で、音は毎です。日が草に隠れて〝くらい〟という意味の字です。晦冥。転じて、〝月の見えない暗夜〟また〝つごもり〟。晦日（みそか）。

海は、晦冥の意味の毎と水との会意形声字です。〝海は深くて暗い〟ので「溟」とも言います。「南溟」は「南海」と同義です。

悔は、晦冥の意味の毎と心との会意形声字です。ああ残念なことをしたと、うらめしく思って、〝心がくらい〟という意味の字です。〝くやむ〟こと。後悔。悔悟。

音

音の古い形は[illegible]で否と同じ形です。音は hi（ヒ、またはハイ）。〝反対〟〝そむく〟という意味で、「背」とは同音同義です。背の音は hi（ヒ、またはハイ）で、「違背」「背反」などと使われます。

倍は、〝そむく〟意味の音と人との会意形声字で、〝人にそむく〟という意味の字です。倍反（そむく）。対立が生ずることは、一が二になることで、〝一が二にふえる〟ことを倍というようになりました。XYという対立が生ずると、XX‘対YY‘、XXX“対YYY“というように増加します。これが「倍増」です。

剖は、倍の意味の音と刀との会意形声字で、音は音の変化したボウ。数が二倍、三倍となるように〝切り分ける〟ことです。解剖（生物の体を細かく切り分ける）。

培は、倍加（ふやす）の意味の音（はい）と土との会意形声字で、〝草木に肥えた土を加えてやって、草木を育てる〟ことです。〝つちかう〟こと。栽培。培養。

陪は、二倍の意味の音（はい）と阝との会意形声字で、〝二つ並んだ崖や山〟のことを言います。転じて、その小さい方が大きい方に〝つき従う〟という意味で陪と言うようになりました。陪従、陪席、陪食。

賠は、二倍の意味の音と貝との会意形声字で、お金（貝）を二倍にして〝つぐなう〟という意味の字です。相手に損害を与えた場合、そのつぐないとして、二倍に相当する金額を支払うのが普通です。これが「賠償」です。